

筑後東部地区遺跡群Ⅰ

県営圃場整備事業筑後東部地区内所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書 第11集

1 9 9 4

筑 後 市 教 育 委 員 会

筑後東部地区遺跡群Ⅰ

新溝丸田遺跡

鶴田前畠遺跡

鶴田榎原遺跡

(第1次調査)

鶴田岸添遺跡

(第1次調査)

1994

筑後市教育委員会

序

筑後東部地区内遺跡群の発掘調査は県営圃場整備事業筑後東部地区に伴って平成5年度に同地区内に所在する埋蔵文化財のうち水路掘削や削土により消滅することとなった鶴田岸添遺跡・鶴田楢原遺跡・鶴田前畠遺跡・新溝丸田遺跡の一部の調査を行ったものです。

県営圃場整備事業筑後東部地区の実施される一帯は筑後市内でも有数の遺跡銀座ですが、圃場整備事業をはじめとして各種の開発が押し寄せていて、当地域に所在する文化財の調査そして保護は、その早急な対応が求められています。

今回、これらの遺跡からは弥生時代から中世にかけての先人たちの足跡に触れることができました。その中で様々なことを感じ、そして、これから我々が進むべき方向を見つける努力を続けなければなりません。

この報告書は10ヶ月にわたる発掘調査の記録であり、今後の文化財愛護思想普及の一助として、また学術研究の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

おわりに、この報告書の発行にあたり、いろいろと御指導・御協力いただいた関係各位と発掘調査に参加された皆様に対しまして、厚く御礼申し上げる次第です。

平成6年3月31日

筑後市教育委員会

教育長 森田基之

例 言

1. 本書は、福岡県筑後川水系農地開発事務所が平成5年度に実施した県営圃場整備事業筑後東部地区の事前調査として、筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。調査関係者はI章に記したとおりである。なお出土遺物・図面・写真等は筑後市教育委員会において収蔵・保管している。
3. 本書に使用した図面のうち、遺構実測図は永見秀徳・塚本映子・大島真一郎・原武孝利・末吉隆弥・馬場敦子・野田洋子・奥村太郎が作成し、遺物実測図は塚本・平塚あけみが作成した。また、浄書は平塚が行なった。ただし、新溝丸田遺跡の遺構全体図作成は朝日航洋株式会社に委託した。
4. 本書に使用した遺構写真は永見・塚本、空中写真は（有）空中写真企画、遺物写真は小林勇作・碓井当磨による。
5. 今回の調査に用いた測量座標は国土調査法第II座標系を基準としている。また水準はT.P.を方位はG.N.をそれぞれ基準とする。

目 次

I. 調査経過	1
II. 位置と環境	2
III. 調査成果	
(1) 新溝丸田遺跡	4
(2) 鶴田前畠遺跡	14
(3) 鶴田楯原遺跡 第1次調査	18
(4) 鶴田岸添遺跡 第1次調査	27
IV. まとめ	34

I. 調査経過

県営圃場整備筑後東部地区は、福岡県の南部、筑後市の南東部に位置する。この地区は、米麦中心の二毛作穀倉地帯として農業経営が行われてきたが、近代農業構造の改善に伴い施設園芸が導入され、農業経営は多様化している。しかし、耕地は不整形かつ狭小で分散され、道路や用水路の整備は行われていない状況である。こうした状況の中、耕地の集団化、区画整理、農道の整備、用排水路の分離など営農体系を確立するため、平成3年度から圃場整備事業が実施されるようになった。

発掘調査経過については、平成5年度に福岡県筑後川水系農地開発事務所から筑後市教育委員会へ予定地内埋蔵文化財の確認依頼があり、これを受けた筑後市教育委員会では、同年中に試掘調査を実施し、工事予定地内に埋蔵文化財が認められた事を事業関係者に回答し協議をおこなった。協議の結果、「筑後東部地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査」として、掘削の及ぶ支線用排水路工事予定地および面の削平を受ける箇所を調査することになった。埋蔵文化財発掘調査の費用については国、県から一部の補助を受け、受益者負担分については文化財担当部局で負担し、残る費用については水系事務所にて準備することで合意した。調査は、平成5年度に実施し遺物の整理および報告書作成については、筑後市役所内文化財整理室にて行った。

なお、発掘調査および整理作業の関係者は次のとおりである。

1) 総括

教育長	森田基之	技師	永見秀徳(調査担当)
教育部長	津留忠義		小林勇作
社会教育課長	下川雅晴		塚本映子(調査担当)
社会教育係長	松永盛四郎		(囑託 平成6年7月1日～)

3) 発掘調査参加者(順不同、敬称略)

大島真一郎(調査補助員)

愛川一枝	今村鈴子	牛島蓉子	太田黒三枝	大石新一	奥村太郎
小野清次	小野ミノブ	加藤礼子	瀬戸八重子	津留フヂエ	松尾輝子
吉開朝子	浅山頼子	椛島美恵子	北島清	北島トモエ	蒲池京子
古賀妙子	平尾仁子	村上幸子	井村静香	田島好江	壇ちえ子
中沢やよい	野田洋子	矢次和枝	吉田喜美子	吉田裕	

4) 整理作業参加者(順不同、敬称略)

平塚あけみ(整理補助員)	大島真一郎	桜木千鶴	野間口靖子	馬場敦子
深川善子	湊まど香			

II 位置と環境

本書で報告する筑後市東部地区遺跡群は、筑後市の南東部に位置し、鶴田岸添遺跡は、筑後市鶴田字岸添、鶴田榎原遺跡は同市鶴田字榎原、新溝丸田遺跡は同市新溝字丸田に所在する。

筑後市は、福岡県の西南部に位置し、筑後平野のほぼ中央をしめる。北を久留米市、東を八女市、南を瀬高町、西を三潞町に接し、主要都市からは久留米市から南に12km、大牟田市から北に21kmの距離にある。

筑後市は、地形的にみると、北に背振山、東に水縄山地、南に筑肥山地を望む。また、水縄山地から八女市、広川町を経て南西にのびる八女丘陵は、釈迦ヶ岳より流れだす矢部川の右岸にひろがり、筑後市北東部から有明海にのびる。市内は標高5~40m内におさまり、山地から低湿地に漸移する地域に位置している。

今回報告する筑後市東部遺跡群は、筑後市の南東部にあたり、南は瀬高町、東は八女市に隣接する。南に隣接する瀬高町とは矢部川を郡境とし、東の八女市とは八女丘陵でつながる穀倉地帯である。付近一帯は丘陵末にあたり、微高地がつくるゆるやかな起伏を呈している。

続いて市内の主な遺跡を時代を追ってみてみることにする。旧石器時代の遺跡として確認されたものが見当たらないので、以下、縄文時代の遺跡以後の主要遺跡を概観する。

縄文時代の遺跡は、市南部に集中しており、同市長崎の坊田遺跡、同市尾島の裏山遺跡等がある。裏山遺跡では集落跡を確認、押型文土器が採集されている。

弥生時代の遺跡は、板付1式~須玖式期の土器を出土した住居、墳墓群で同市常用の常用遺跡、最古の弥生式土器である板付式土器の流れをくむ土器及び縄文時代以来の流れをくむ亀の甲式土器の共存がみうけられる同市上北島の平塚遺跡、この他、弥生時代中期末~古墳時代に至る住居跡が多数発見された同市蔵数の蔵数森ノ木遺跡等がある。弥生時代も中期以降になると同市梅島の梅島遺跡、同市上北島の狐塚遺跡など多くの遺跡が点在する。

古墳時代は、弥生時代のムラが存続しており、集落の遺跡として、前述の蔵数森ノ木遺跡などがあげられ、また、古墳時代中期にはいると、石人山古墳をはじめとして、岩戸山古墳、善蔵塚古墳、乗場古墳、鶴見山古墳などの大規模な前方後円墳が八女丘陵上に築造される。また、これら大型古墳とは別に、欠塚古墳等の小規模な古墳が市内に点在するように築造される。

奈良時代には、同市前津に所在する前津中の玉遺跡、同市羽犬塚中学校内遺跡、同市若菜に所在する若菜遺跡等がある。また、市内のほぼ中央を縦断するように推定西海道が走り、「延喜式」にみえる古代駅家、葛野駅は筑後市前津字車路付近に推定する説がある。近世になると薩摩街道の宿駅として羽犬塚宿が栄えていた。

筑後市全体の主な遺跡から、本書の筑後市東部地区遺跡群周辺に眼を転じてみると、鶴田岸添遺跡の付近には北西に約1km地点に狐塚遺跡がある。なお、関係を有しないが、西に約500m付近に推定西海道が南北に通る。すぐ北側の集落には、平家落人の平宗清が開いたと伝えられ

る宗清寺が現存している。鶴田榑原遺跡は、西に約50mの所に鶴田前島遺跡がある。土器が少なく鶴田榑原遺跡との関連ははっきりしないが、弥生時代にかかる河川跡も発見され、古代の地形を考えるうえでも貴重な遺跡といえよう。また、すぐ南側は字名に本屋敷という名をとどめており、昭和28年の水害時における矢部川復旧のための土取りの際に、多量の土器が出土したと聞き及んでいる。新溝丸田遺跡は、調査地南側の耕作地を試掘した際には遺構らしきものは発見できず、調査地南を流れる小川より北に広がる現在の新溝の集落を中心とした集落があったものと考えられる。

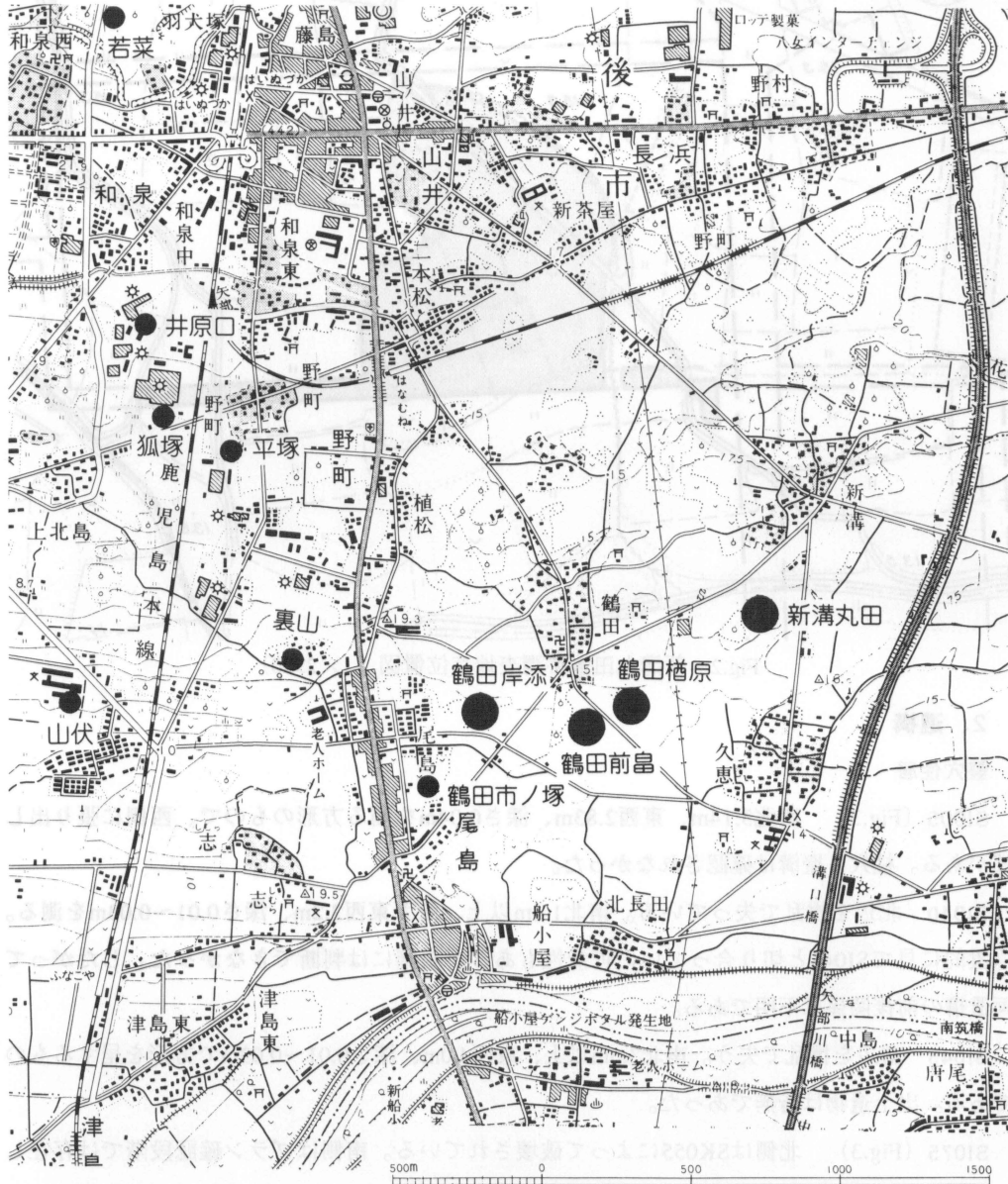


Fig.1 東部地区周辺の遺跡分布図

III. 調査成果

(1) 新溝丸田遺跡

1. はじめに

今次の調査において竪穴住居4棟、掘立柱建物1棟のほか溝、土坑、木棺墓と考えられる遺構等を検出した。かなり広域に調査したが出土遺物に恵まれず、年代を決定できない遺構が多い。



Fig.2 新溝丸田遺跡調査地点位置図 (1/2500)

2. 遺構

竪穴住居

SI005 (Fig.3) 南北3.14m、東西2.83m、深さ0.04mを測る方形のもので、西側に張り出し部がある。柱穴、壁溝は確認されなかった。

SI040 北辺を攪乱で失っている。南北1.4m以上、深さ東西2.2m、深さ0.01~0.03mを測る。位置的に見てSI045と切り合っていた可能性もあるが明確には判断できなかった。したがって両遺構の前後関係は不明である。

SI045 南辺を攪乱で失う。南北3.5m以上、東西4.0m、深さ0.01~0.03mで方形を呈するものである。出土遺物は皆無であった。

SI075 (Fig.3) 北側はSK055によって破壊されている。南側はプラン確認段階では存在していたが、作業休日中に開発サイドの勘違いによって幅3.5m、長さ80m以上の範囲を掘削されてしまい、南側の詳細はまったくわからなくなってしまった。検出段階では2棟の住居が切り

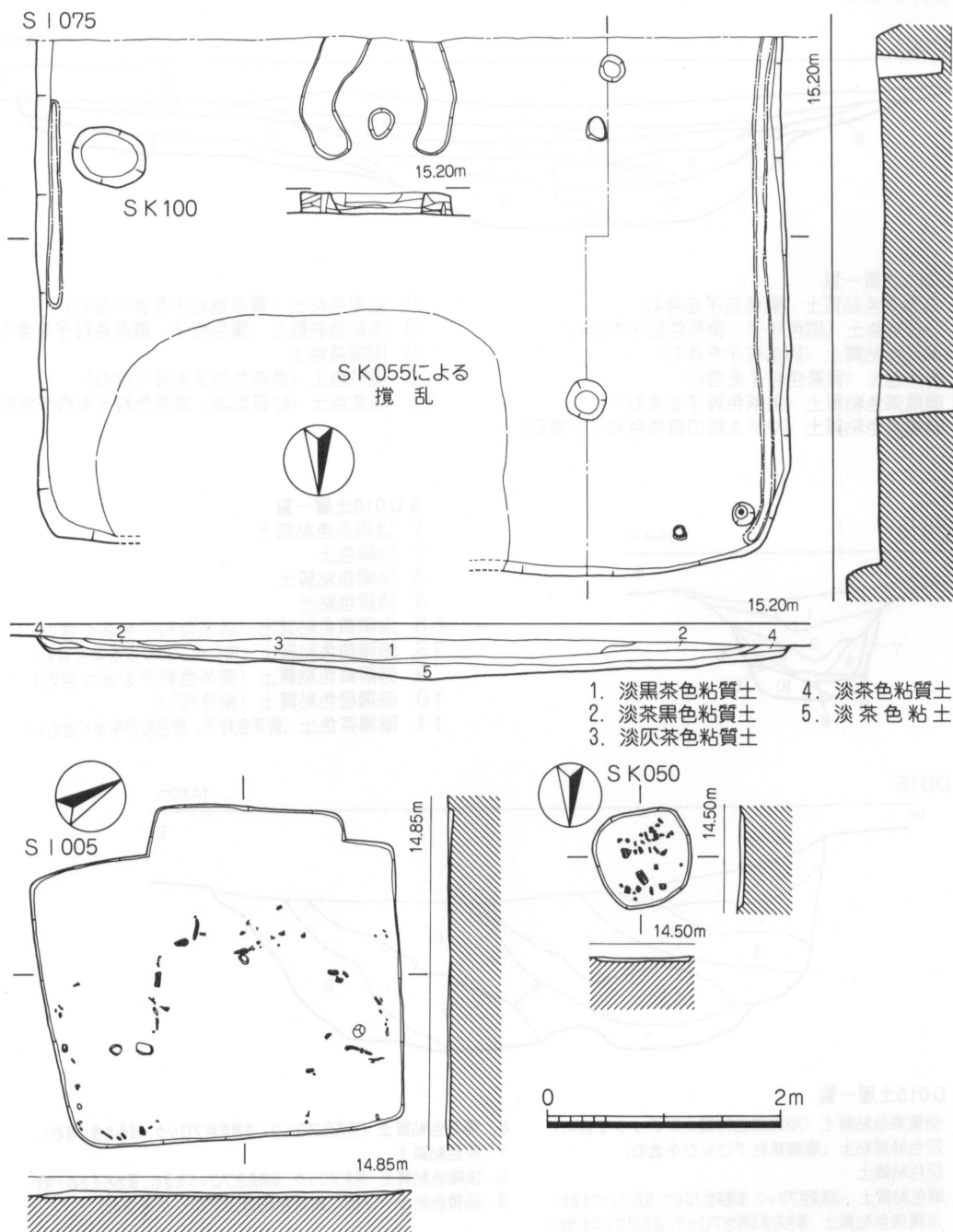
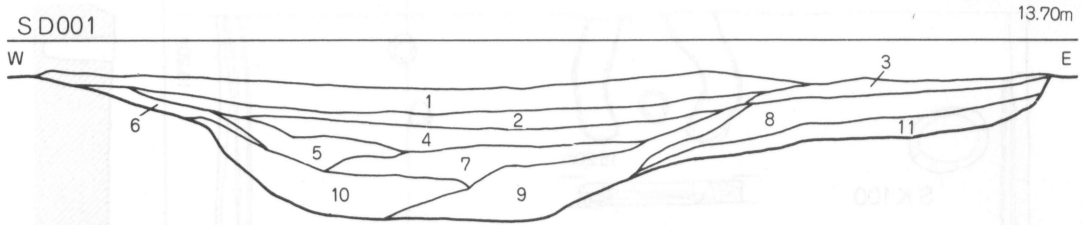


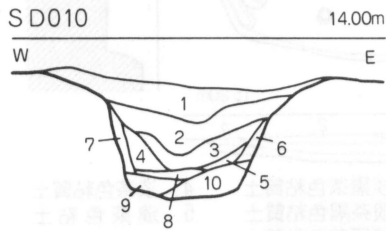
Fig.3 新溝丸田遺跡住居跡・土坑実測図 (1/60)

合っている可能性を考えさせる状況であったが、この掘削によって肝心の部分が失われ残存部分では明確にできなかった。したがって竈がプラン中程に存在するような形状になっているが、これは切り合っていた後出する遺構に伴うものと考えるのが妥当なようである。さて確認し得た遺構は南北5.0m (4.57m分を調査)、東西6.42m、深さは貼り床まで0.12mである。竈は南辺の中央やや東寄りに作られ、中央に0.28×0.22m、深さ0.03mの小さな窪みがある。壁溝は東壁で



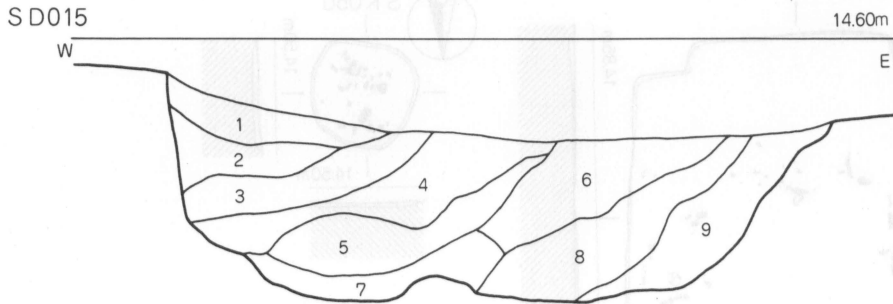
SD001土層一覧

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1. 淡黒茶色粘質土 (黒色粒子を含む) | 7. 淡黒色粘土 (黄茶色粒子を多く含む) |
| 2. 淡黒茶色土 (黒色粒子、黄茶色粒子を含む) | 8. 茶黒色粘質土 (黒色粒子、黄茶色粒子を含む) |
| 3. 黒茶色粘質土 (黒色粒子を含む) | 9. 明黒茶色土 |
| 4. 黒茶色土 (黄茶色粒子を含む) | 10. 黒茶色土 (黄茶色粒子を多く含む) |
| 5. 暗黒茶色粘質土 (黄茶色粒子を含む) | 11. 暗茶色土 (砂質気味。黄茶色粒子を若干含む) |
| 6. 暗黒茶色粘質土 (やや大粒の黄茶色粒子を含む) | |



SD010土層一覧

- | |
|-----------------------------|
| 1. 淡黒茶色粘質土 |
| 2. 淡黒色土 |
| 3. 淡黒色粘質土 |
| 4. 淡黒色粘土 |
| 5.6. 淡黒黄色粘質土 (黄茶色粒子を多く含む) |
| 7.8. 暗黒黄色粘質土 (黄茶色ブロックを多く含む) |
| 9. 暗黒黄色粘質土 (黄茶色粒子を多く含む) |
| 10. 暗黒橙色粘質土 (粘性弱い) |
| 11. 暗黒茶色土 (黄茶色粒子、橙色粒子を多く含む) |



SD015土層一覧

- | | |
|--|--|
| 1. 暗黄茶色粘質土 (淡黒茶色粘質土ブロックを含む) | 6. 黒茶色粘質土 (暗茶色ブロック、淡黒茶色ブロック、灰色を多く含む) |
| 2. 灰色砂質粘土 (黒黄茶色ブロックを含む) | 7. 灰色粘質土 |
| 3. 灰色粘質土 | 8. 淡黒色粘質土 (黒色ブロック、淡黒茶色ブロックを含む、灰色粒子を若干含む) |
| 4. 黒色粘質土 (淡黒茶色ブロック、暗黄茶色ブロック、灰色ブロックを含む) | 9. 灰黄色粘土 (下部に黄茶色粘質土ブロックを含む) |
| 5. 淡黒茶色粘質土 (黒色粒子及同色ブロック、灰色ブロックを含む) | |

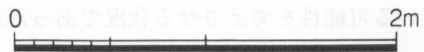


Fig.4 新溝丸田遺跡検出遺構土層観察図 (1/40)

は1.8m程度が存在するが、西側ではほぼ一辺全体みられる。深さは0.02mほどである。柱穴は西側で2箇所確認したが東側では明らかにできなかった。新期に属する住居は竈以外まったく不明である。

掘立柱建物

SB085 調査区内には多数の柱穴と思われるピットが確認されているが、建物として認識できたのはこの遺構だけである。2×2間で、東西4.2m、南北4.5mを測る。柱穴から土師器小皿が出土しており、中世まで下る遺構である。

溝

SD001 (Fig.4) 南北方向の溝で、検出長11.7m、幅4.6～5.0m、深さ0.75m内外を測る。土層の観察結果から2次にわたる流れがあったようで、土層図4～9層が新しい流れに該当するものと考えられる。なお土層図1～3層は溝廃絶後の埋土の沈下によって堆積した土層ではないかと考えている。遺物が出土しなかったため帰属する時期は不明である。

SD004 調査区西端で検出したL字形に湾曲する溝である。類似の溝が近接して4条存在するが、いずれも埋土は締まりがなく時期的には新しい段階に帰属するものと思われる。

SD010 (Fig.4) 検出長12.2m、幅1.0m内外、深さ0.65mを測る。溝の断面形状は逆台形状を呈している。遺物が出土しなかったため帰属する時期は不明である。

SD015 (Fig.4) 検出長11.5m、幅2.5～4.5m、深さ0.8～1.2mを測る。埋没土の土層観察の結果では通常の溝の堆積状況を示さず、東側から順次土が侵入している様相がみられ、人為的な埋め戻しを行った可能性が考えられる。遺物が出土しなかったため帰属する時期は不明である。

SD020 検出長9.5m、幅2.0～2.5mを測る。溝の東側には段落ちがあり、その深さは0.1～0.18mで、溝底面までの深さは0.62～0.90mである。遺物が出土しなかったため帰属する時期は不明である。

SD030 (Fig.5) 設定した調査区の関係から3つに分割されて検出した。東西方向に蛇行して流れる溝で検出最大長72.5m、幅は両肩が確認できた地点で4mであるが、5m以上になる部分も存在する。深さは調査区の西端付近で1.8mである。

SD035 調査区を南北に貫通するように検出した溝状を呈するものであるが、現代の攪乱と認識すべきものであった。

SD065 (Fig.5) 西端に設定した調査区で検出したもので、東でわずかに北方向へ蛇行している。検出長20.8m、幅1.3m程度、深さ0.15mである。蛇行した北東延長上にあるSX060とは連続する可能性が強い。

SD070 (Fig.5) 検出長87m、幅0.4～0.7m、深さ0.3m内外である。

土坑

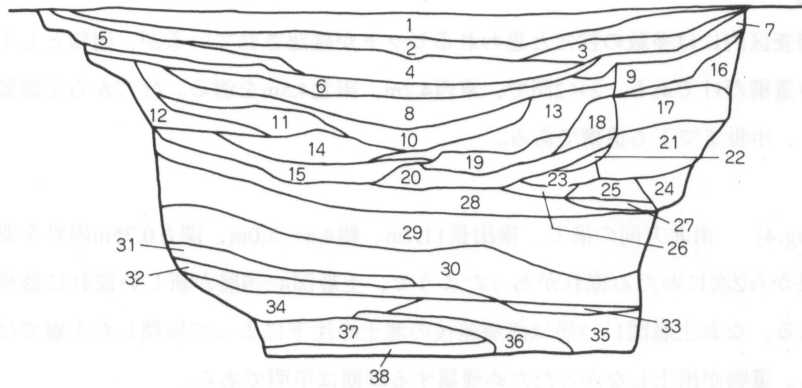
SK050 0.85×0.85m、深さ0.04mで略円形を呈する。

SK055 (Fig.5) 住居跡SI075を切るピットで、3.7×3.6m、深さ1.02mを測る。埋土は盆状の堆積を示す。遺物は埋土中から若干出土し、最も新しい遺物は近世と思われる陶器椀である。

SK100 SI075の床面から切り込む土坑で、屋内土坑と考えられる。東西0.67m、南北0.5m、

SD030

15.20m

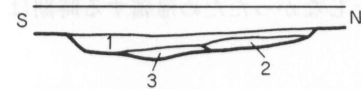


SD030土層一覧

- | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|----------------------------|
| 1. 淡黒茶色粘質土 | 14. 淡茶色粘土 (黒灰色粒子、黄茶色粒子をきむ) | 27. 明茶色粘土 (小礫含む) |
| 2. 淡黒灰色粘質土 | 15. 淡茶色土 | 29. 淡茶色砂土 (3~5mm大の砂粒が混じる) |
| 3. 淡黒黄色粘質土 (黄茶色粒子をきむ) | 16. 淡黄茶色土 (黄茶色粒子をきむ) | 29. 淡茶色砂質土 (小礫含む) |
| 4. 淡灰色粘質土 (黄茶色粒子をきむ) | 17. 暗黄茶色粘質土 (1~5mm大の砂粒が混じる) | 30. 淡茶黒色砂土 (黒色粒子をきむ) |
| 5. 淡灰色土 | 18. 暗茶色粘質土 | 31. 淡黒茶色砂礫土 |
| 6. 淡灰茶色粘質土 (黄茶色粒子をきむ) | 19. 暗茶灰色粘質土 | 32. 淡黒茶色砂土 |
| 7. 淡灰茶色土 (黄茶色粒子をきむ) | 20. 暗灰茶色粘質土 | 33. 暗黒茶色砂礫土 |
| 8. 淡灰茶色粘土 | 21. 暗黄茶色粘土 (砂粒をきむ) | 34. 淡黒茶色砂礫土 (31と同質) |
| 9. 淡黄茶色粘質土 (黄茶色粒子、灰茶色粒子をきむ) | 22. 暗茶色土 | 35. 淡黒黄色砂礫土 (黄茶色粘土ブロックをきむ) |
| 10. 淡灰黒色粘質土 (黒灰色粒子をきむ) | 23. 暗茶黄色粘質土 | 36. 淡黒茶色砂質土 |
| 11. 淡灰黒色土 | 24. 暗黄茶色砂土 | 37. 明黒茶色砂土 |
| 12. 淡灰黒色粘土 (黒灰色粒子をきむ) | 25. 明茶色粘質土 (1~5mm大の小石が混じる) | 38. 暗黒茶色砂土 |
| 13. 淡茶色粘質土 | 26. 明茶色粘土 | |

SD065

13.80m



SD065土層一覧

1. 淡黒茶色粘質土
2. 黒茶色粘質土
3. 淡黒黄色粘質土

SD070

15.70m

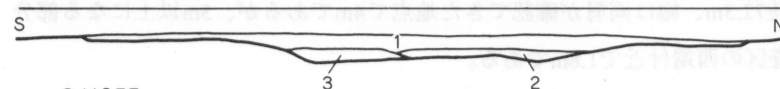


SD070土層一覧

1. 暗黄茶色粘質土
2. 暗茶色粘質土
3. 淡黒茶色粘質土

SX060

14.60m

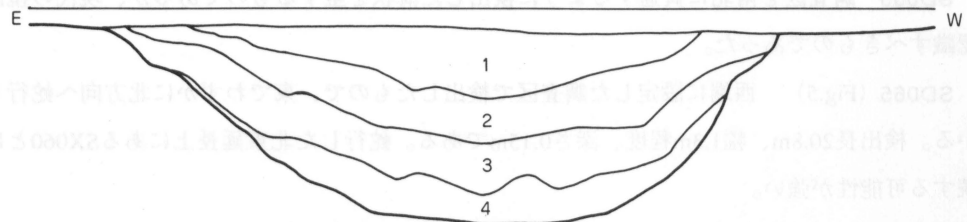


SX060土層一覧

1. 淡灰色砂質土
2. 暗灰色粘質土
3. 暗灰色粘土

SK055

15.10m



SK055土層一覧

1. 暗茶色砂質土
2. 暗黄茶色土
3. 淡黄茶色粘質土 (砂・小礫混入)
4. 暗黄茶色粘土 (砂・小礫混入)

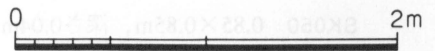


Fig.5 新溝丸田遺跡各遺構土層観察図 (1/40)

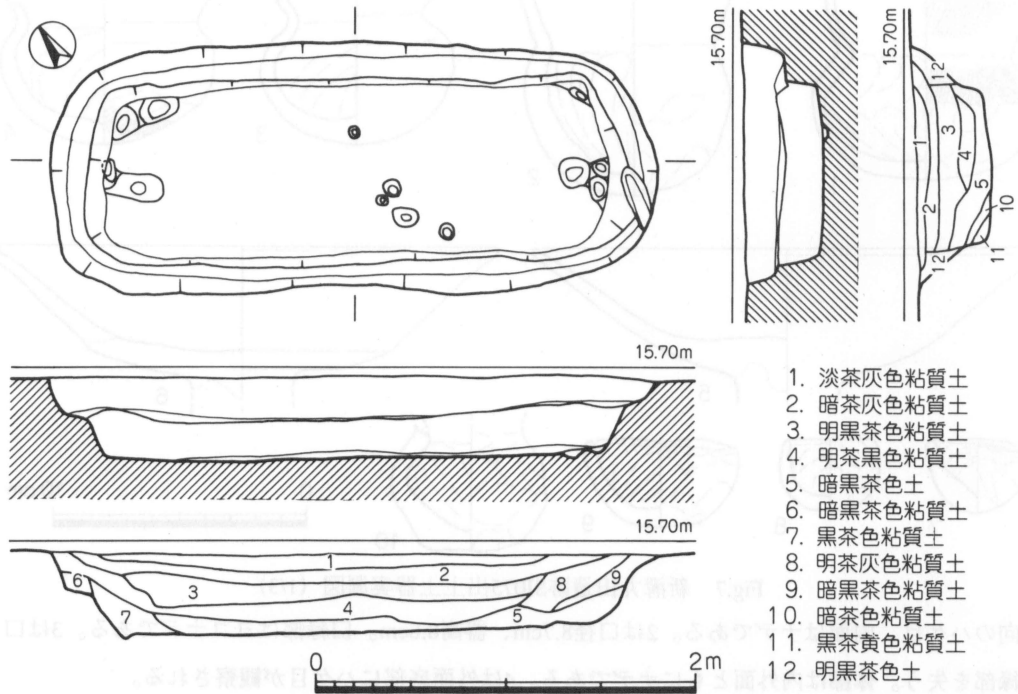


Fig.6 新溝丸田遺跡ST080実測図・土層観察図 (1/40)

深さ0.23mを測る。

木棺墓

ST080 (Fig.6) 短軸方向の土層観察において棺の側板の痕跡ではないかと思われる、ほぼ垂直に立ち上がる土層を認識したことから墳墓ではないかと判断した。したがって土層番号12は裏込め土と考えられる。遺構は長さ3.17m、幅1.29m、深さ0.45mを測る長楕円形を呈するもので、2段掘りになっている。土坑底の規模は長さ2.60m、幅0.87mである。出土遺物はない。

段落ち

SX060 (Fig.5) 幅7m以上の段落ち状を呈するものであるが、上面の埋土を除去すると幅0.6~3.0mの溝状を呈した遺構が確認された。深さは0.10mにも満たないが、その方向性からSD065の延長上にあり、埋土も近似することから連続する遺構であると考えている。出土遺物から近世以降まで下るものと考えられる。

3. 出土遺物

SI075出土土器 (Fig.7)

いずれも床付近の埋土中から出土した。

土師器

小型丸底壺 (1~4) 1は口径8.5cm、器高8.4cm。外面は口縁部から体部上位にかけて縦方

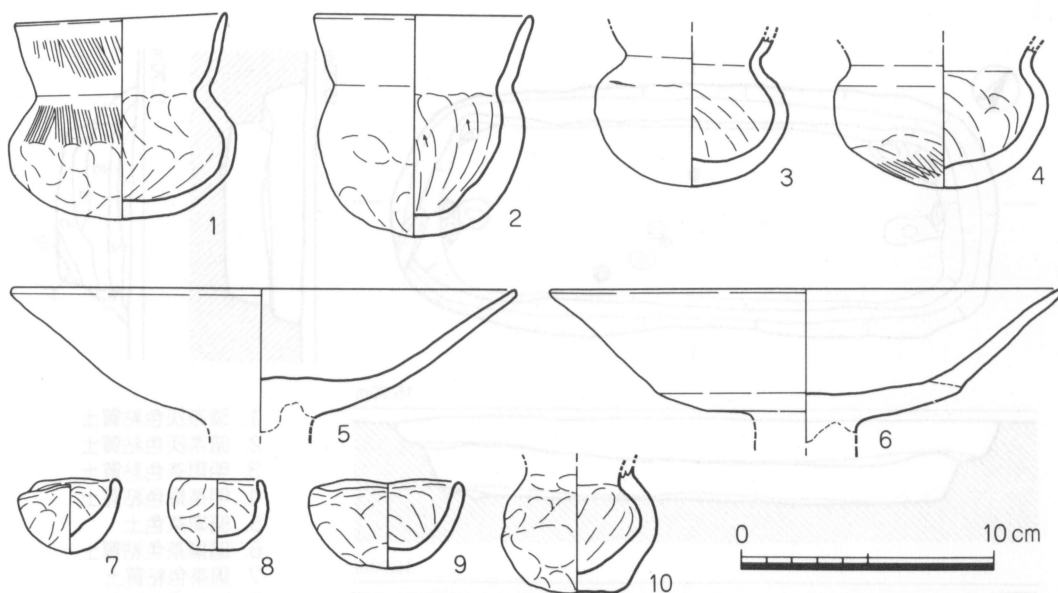
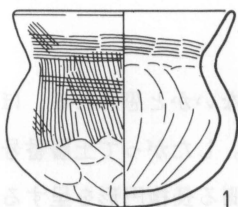


Fig.7 新溝丸田遺跡SI075出土土器実測図 (1/3)

向のハケ目、内面はナデである。2は口径8.7cm、器高8.8cm。口縁部はヨコナデである。3は口縁部を失う。体部は内外面ともにナデである。4は外面底部にハケ目が観察される。

高坏 (5・6) 口径20.0・20.3cm。体部はヨコナデである。脚部は接合部分から剥離しており、接合方法の一端が窺える。

SD030



小鉢 (7~9) 口径3.4~6.0cm、器高2.8~3.5cm。すべて手捏ねによるものである。

小壺 (10) 口縁部を失うが、手捏ねによる資料である。

SB085 出土土器 (Fig.8)

土師器

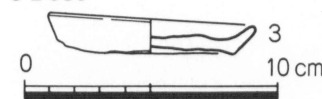
小皿 (3) 口径8.2cm、器高1.4cm、底径7.0cm。底部は糸切りされる。

SD030 出土土器 (Fig.8)

土師器

小型丸底壺 (1) 口径8.8cm、器高7.8cm。口縁部は横方向のハケ目、体部上位は縦方向のハケ目を基本とする。体部外面はヘラケズリである。

SB085



壺 (2) 口径11.1cm、器高12.6cm。外面は口縁部から体部にかけてハケ目、内面はヘラケズリである。

SK100 出土土器 (Fig.9)

土師器

Fig.8 新溝丸田遺跡各遺構出土土器実測図 (1/3)

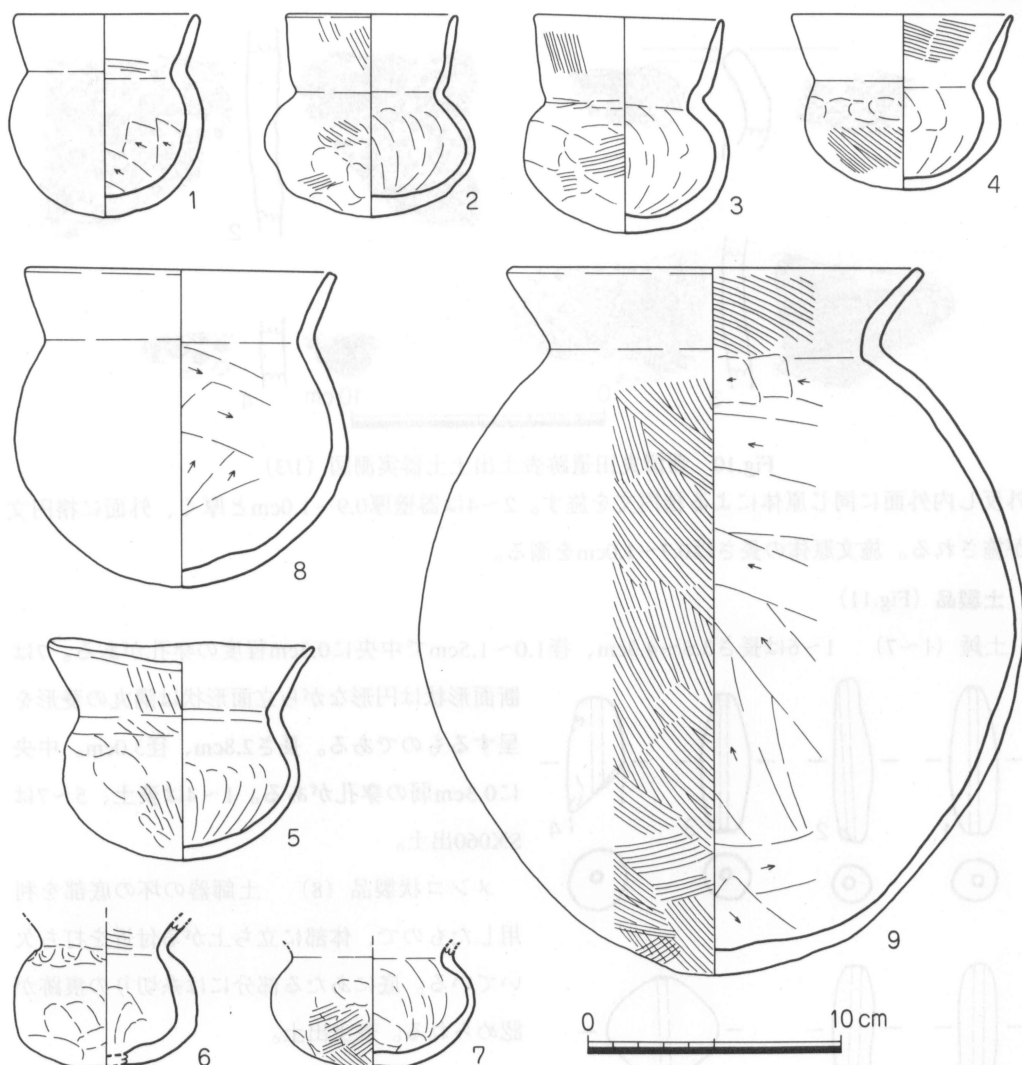


Fig.9 新溝丸田遺跡SK100出土土器実測図 (1/3)

小型丸底壺 (1~7) 1は口径7.4cm、器高8.1cm。口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリである。2は口径6.8cm、器高8.1cm。口縁部及び体部の一部にハケ目が観察される。3は口径7.5cm、器高8.6cm。口縁部及び体部の一部にハケ目が観察される。4は口径8.7cm、器高7.0cm。口縁部の内面と体部外面にハケ目が観察される。5は口径10.5cm、器高8.6cm。6は外面に指圧痕跡が観察され、口縁部内面にはハケ目が認められる。7は体部外面にハケ目が観察される。

壺 (8) 口径12.3cm、器高12.6cm、胴部最大径13.1cm。風化が進み調整は明らかではない。

甕 (9) 口径16.5cm、器高27.8cm、胴部最大径23.9cm。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面及び体部外面はハケ目、体部内面はヘラケズリである。

その他の出土土器

縄文土器 (Fig.10)

すべて押型土器で、胎土に角閃石を多く含む。1は縄文早期早水台式の甕の口縁部細片で、

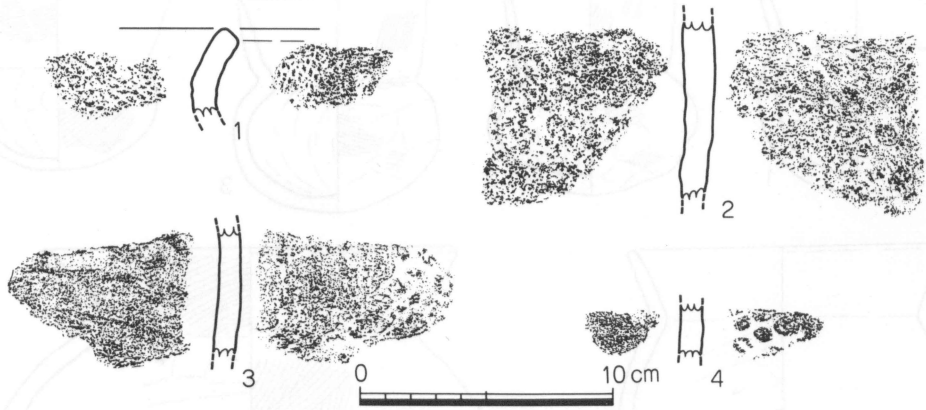
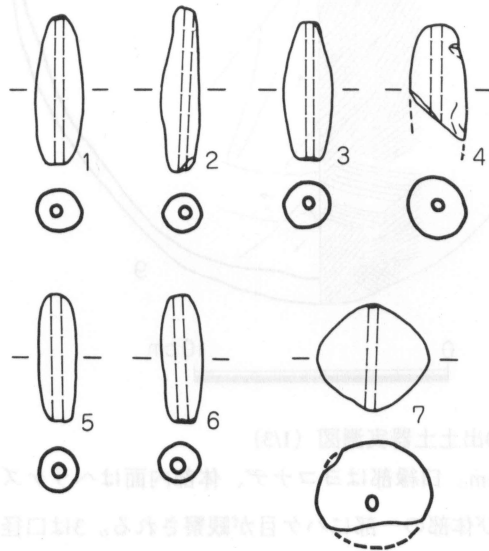


Fig.10 新溝丸田遺跡表土出土土器実測図 (1/3)

外反し内外面に同じ原体による楕円文を施す。2~4は器壁厚0.9~1.0cmと厚く、外面に楕円文が施される。施文原体の長さは0.7~1.0cmを測る。

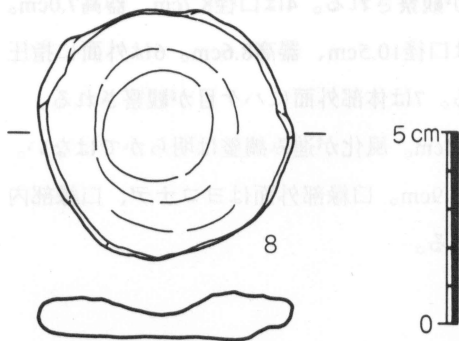
土製品 (Fig.11)

土錘 (1~7) 1~6は長さ3.6~4.3cm、径1.0~1.5cmで中央に0.3cm程度の穿孔がある。7は



断面形状は円形ながら立面形状は隅丸の菱形を呈するものである。長さ2.8cm、径3.0cm。中央に0.3cm程度の穿孔がある。1~4は表土、5~7はSX060出土。

メンコ状製品 (8) 土師器の坏の底部を利用したもので、体部に立ち上がる付近を打ち欠いている。底にあたる部分には糸切りの痕跡が認められる。表土出土。



石器 (Fig.12)

石鏃 (1~3) 3点ともに黒曜石製の石鏃である。2・3は抉りの深い二等辺三角形を呈するもので、片脚を欠損する。両面の調整は丁寧である。1は両脚を欠損するもので、両面の調整は丁寧である。すべて表土出土。

削器 (4) 硅質岩製で、縦長状の剥片を素材とする。表土出土。

石核 (5) 黒曜石製で、両設打面を有する角柱状の石核で、上設に自然面を認める。幅の狭い縦長剥片を剥取している。表土出土。

二次加工石器 (6・7) 6は硅質岩製で、両

Fig.11 新溝丸田遺跡出土土製品実測図 (1/2)

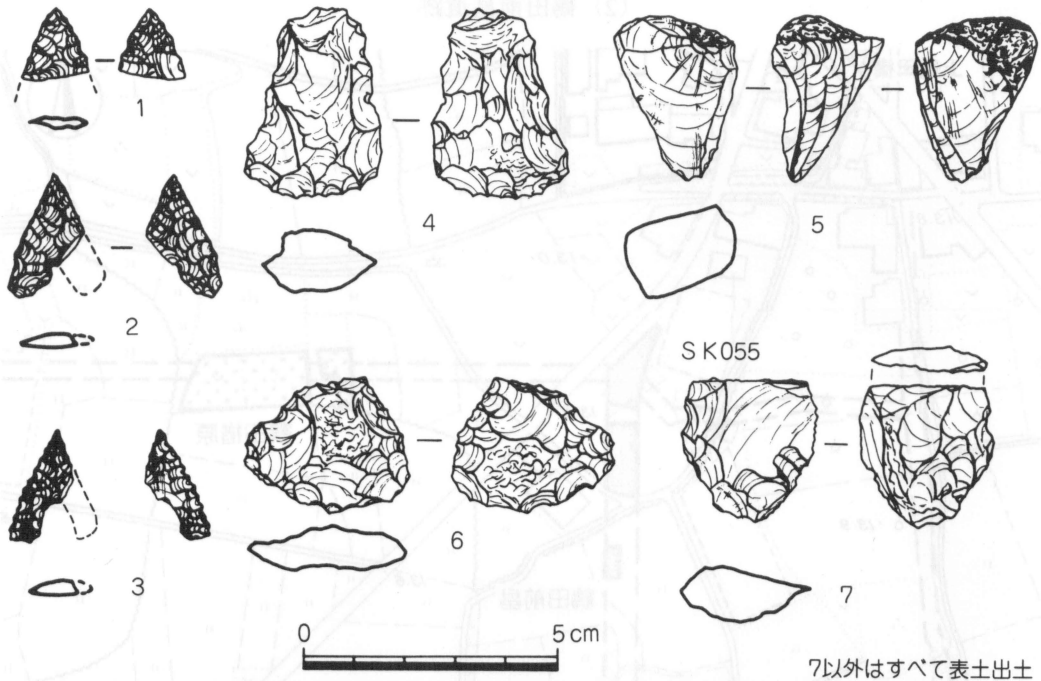


Fig.12 新溝丸田遺跡出土石器実測図 (2/3)

面の周縁に二次加工を施し、刃部を作り出す。表土出土。7は硅質岩製で、五角形状を呈する。表面に大きく剥離面を残し、裏面の片側縁に細かな二次加工を施す。SK055出土。

4、小結

かなり広域に調査を実施することができたが、遺物が安定的に包含されている遺構に恵まれず、東側に延ばした調査区では各遺構とも遺物は皆無に近い状況であり、年代を決定するのはかなり難しい。

この中でSI075住居跡は古墳時代に帰属するものであり、SD030も同時期に帰属するものである。掘立柱建物は遺物から中世に考えられ、一部の遺構は近世以降にくだるものもあるようである。この区画整理事業において隣接地域を調査していることもあり、それらの成果を総合して後日考察を行うこととしたい。

(2) 鶴田前畠遺跡

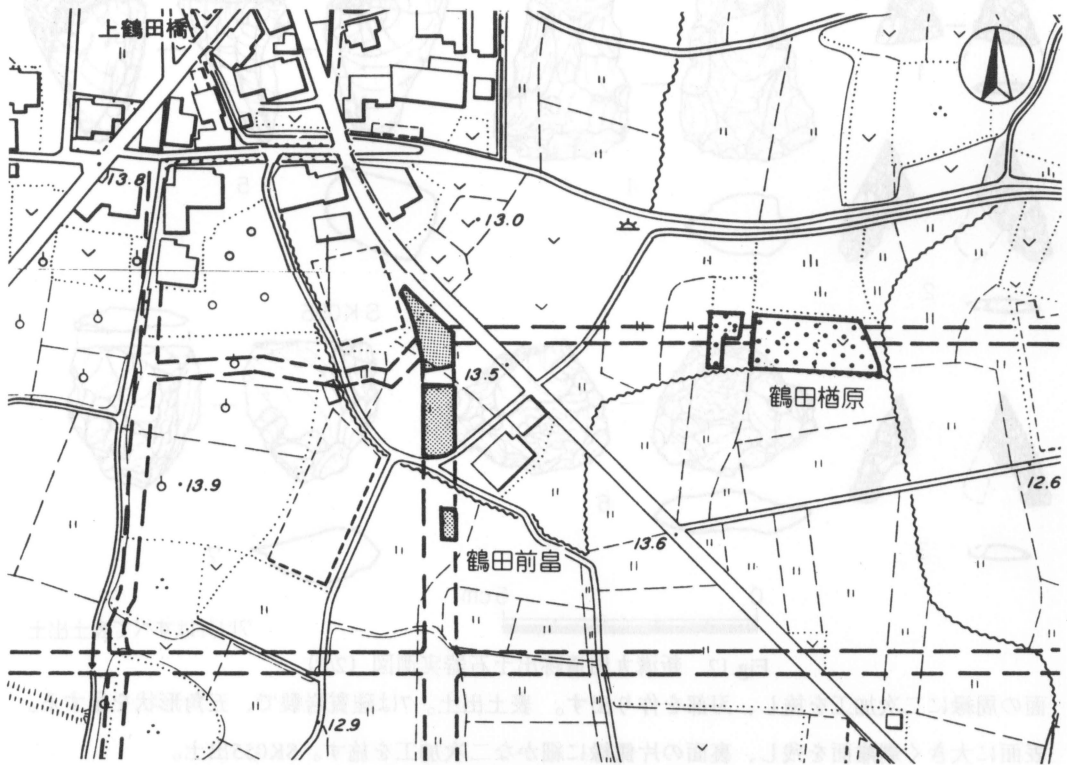


Fig.13 鶴田前畠遺跡調査地点位置図 (1/2500)

1、はじめに

今回の調査では大溝1条とピット群を検出した。ピット群は複数の小規模な掘立柱建物の一部分を構成していると思われるが、確実視できるものは少なく、ここではSB005とした1基のみを報告しておく。

2、遺構

掘立柱建物

SB005 (Fig.14) 東西4.5m (4間)、南北2.2m (2間) 以上を測る。柱掘り方は略円形で、径0.21~0.42m、深さ0.06~0.12m程度である。出土遺物はない。

溝

SD001 (Fig.16) 検出長12.5m、幅8.7~12.6m、深さ1m前後で、南東から北西に流れるものと思われる。流れは大きく2つに分けられ (土層番号1~6と7~17)、新規の溝 (1~6) は幅8m以下である。遺物は埋土中から奈良時代とみられる土師器甕片若

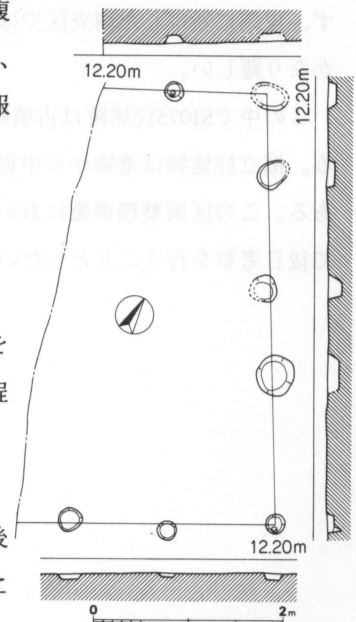


Fig.14 鶴田前畠遺跡 SB005実測図 (1/80)

鶴田前島遺跡

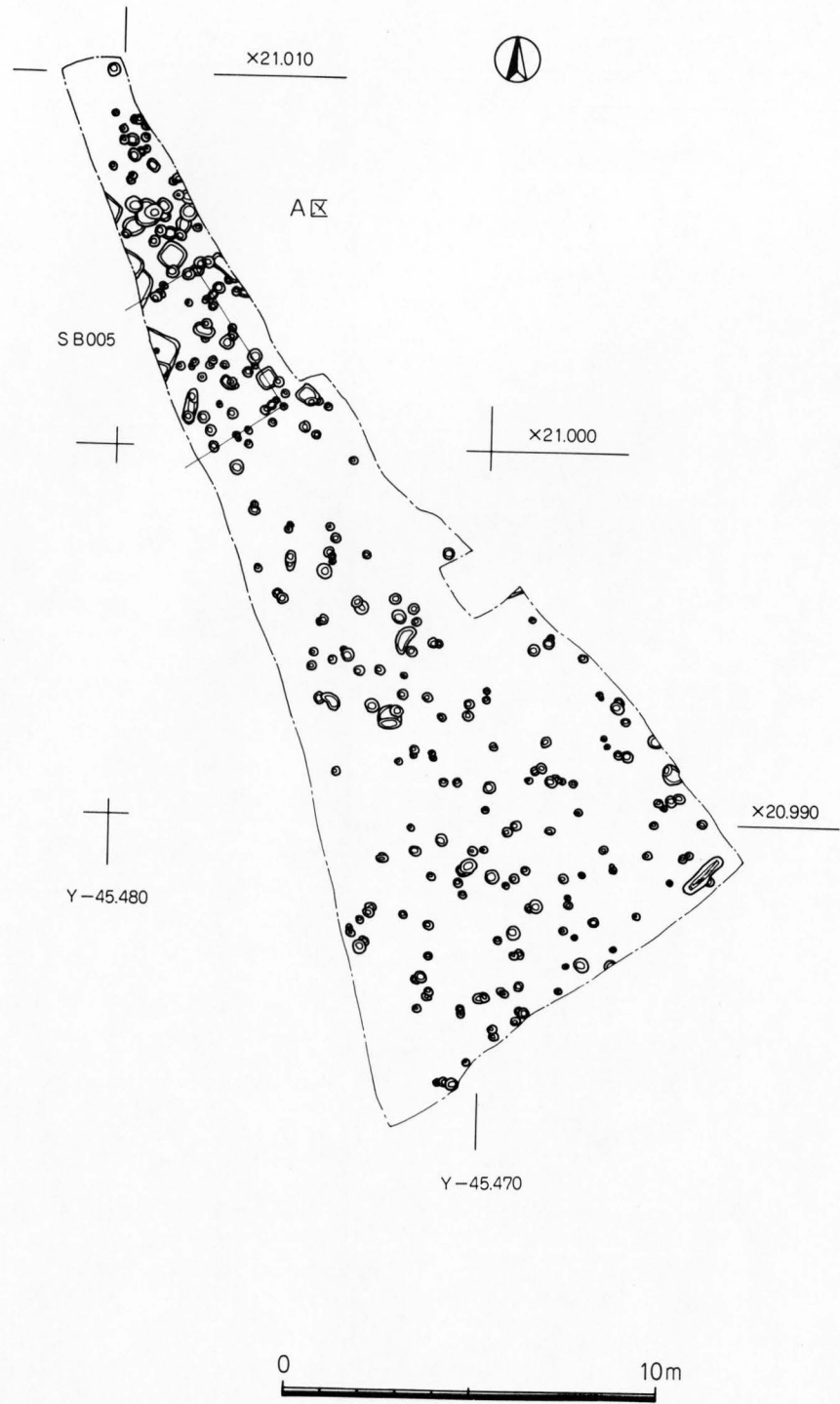
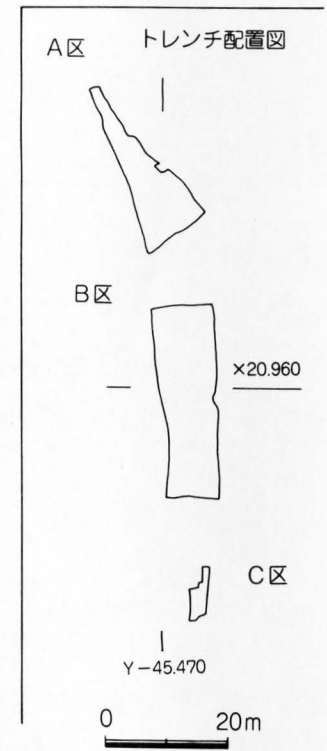
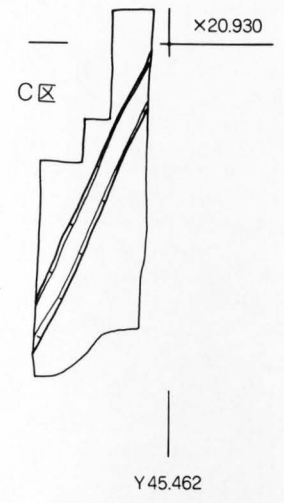
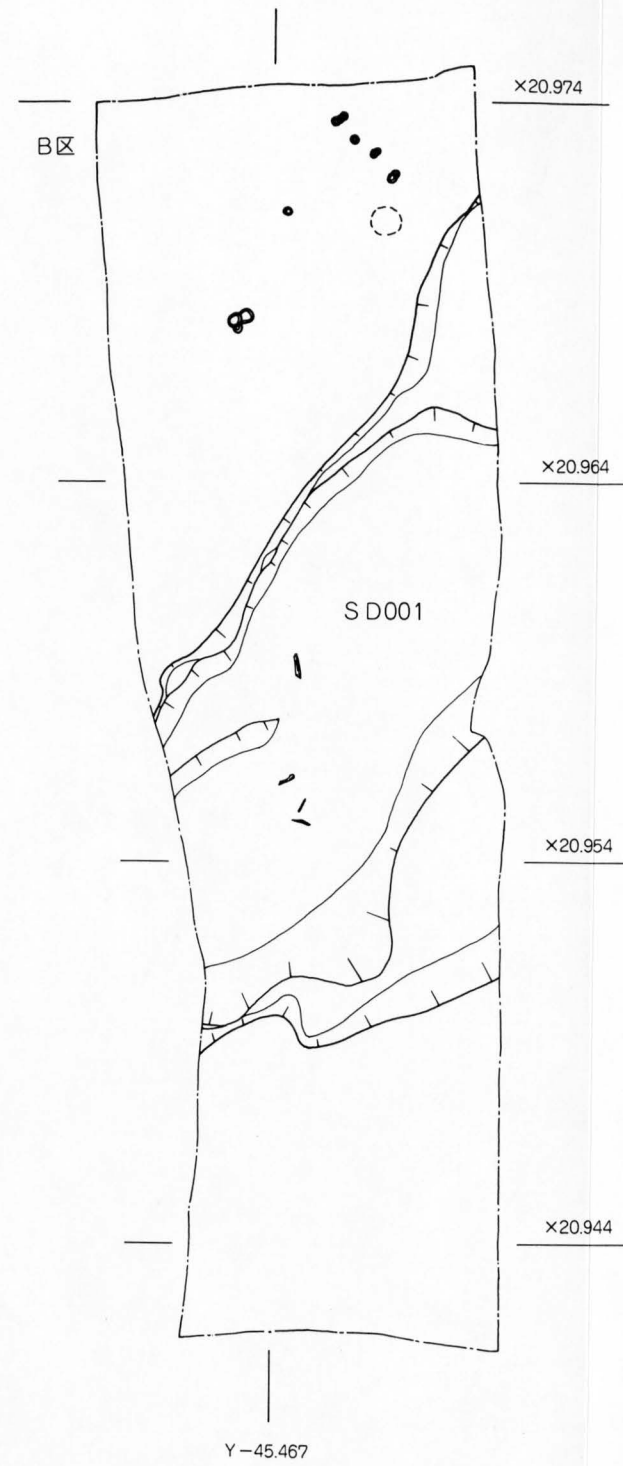
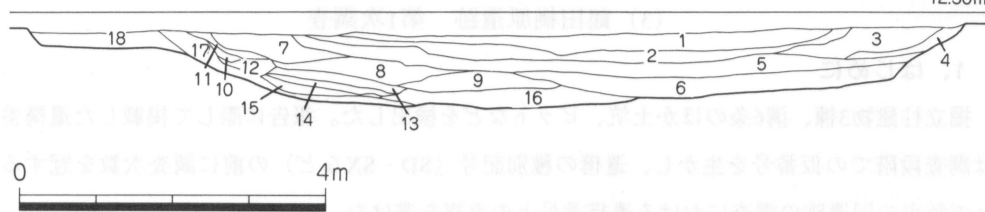


Fig.15 鶴田前島遺跡遺構配置図 (1/200)

鶴田前島遺跡





S D001土層一覧

- | | | |
|-----------|------------|-------------|
| 1. 暗茶色粘土 | 7. 暗青灰色粘土 | 13. 淡白灰色砂土 |
| 2. 暗青灰色粘土 | 8. 淡白灰色砂質土 | 14. 淡青灰色砂質土 |
| 3. 淡灰色粘土 | 9. 暗灰色粘質土 | 15. 暗黄茶色粘質土 |
| 4. 暗茶灰色粘土 | 10. 淡灰色粘質土 | 16. 暗黄茶色土 |
| 5. 暗灰色粘土 | 11. 淡灰色砂質土 | 17. 淡黄茶色粘質土 |
| 6. 暗黄灰色粘土 | 12. 淡灰色砂土 | 18. 暗青灰色粘質土 |

Fig.16 鶴田前島遺跡SD001東壁土層観察図 (1/100)

干、同坏片が出土しているほか、染付片があるが調査段階の混入とみられる。

3、小結

溝SD001は奈良時代の流路とみられるが、溝の西側には関連する遺構は皆無であった。溝の東側では多数のピット群や土坑状遺構などを検出したが、溝と同時期のものがどれに該当するかは出土遺物がきわめて少なく判断が困難である。ただピットの一部や表土中から近世陶器片が出土しており、近世に下る遺構もかなり含まれていることは確実である。

(3) 鶴田橋原遺跡 第1次調査

1、はじめに

掘立柱建物3棟、溝6条のほか土坑、ピットなどを検出した。報告に際して掲載した遺構番号は調査段階での仮番号を生かし、遺構の種別記号（SD・SXなど）の前に調査次数を冠することで将来の同遺跡の調査における遺構番号との重複を避けた。

ex. 第1次調査のS-1が溝であった場合、1SD001となる。

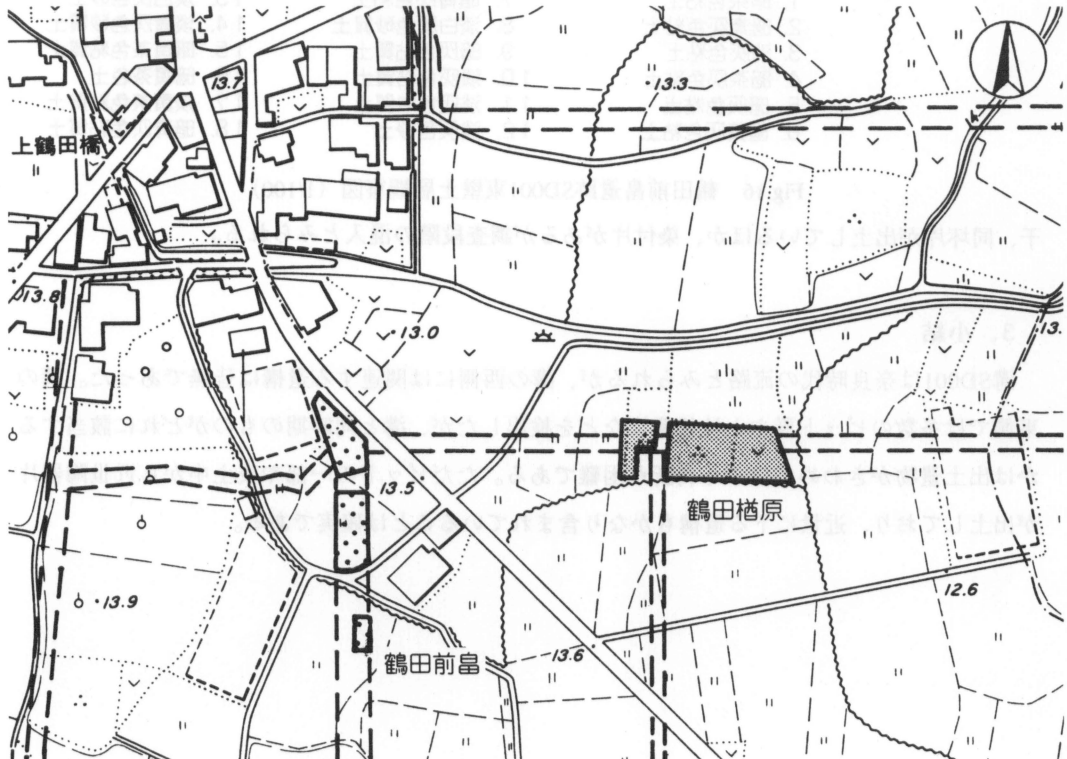


Fig.17 鶴田橋原遺跡調査地点位置図 (1/2500)

2、遺構

掘立柱建物

1SB030 溝群を跨ぐように検出されたもので、東西4.1m、南北3.8mを測る。柱は東西方向で3間であるが南北方向は他の遺構によって明らかではない。1SD020・1SK015よりも古くなることは確実である。

1SB035 1SK015の南側で検出された小規模な建物で、1.9×2.0mのほぼ方形プランを呈している。ただし東西方向は2間分ながら南北方向は1間である。

1SB100 調査区北端で検出され、北側はさらに調査区外に延びているものと推定できる。東西3間（6.3m）で西側に1間（1.0m）の庇が付く建物と推定される。南北方向は1間（1.5m）分を検出したにとどまる。

このほか調査区を見渡すと溝遺構に平行するようにみえるピット群が目につく。なかでも東

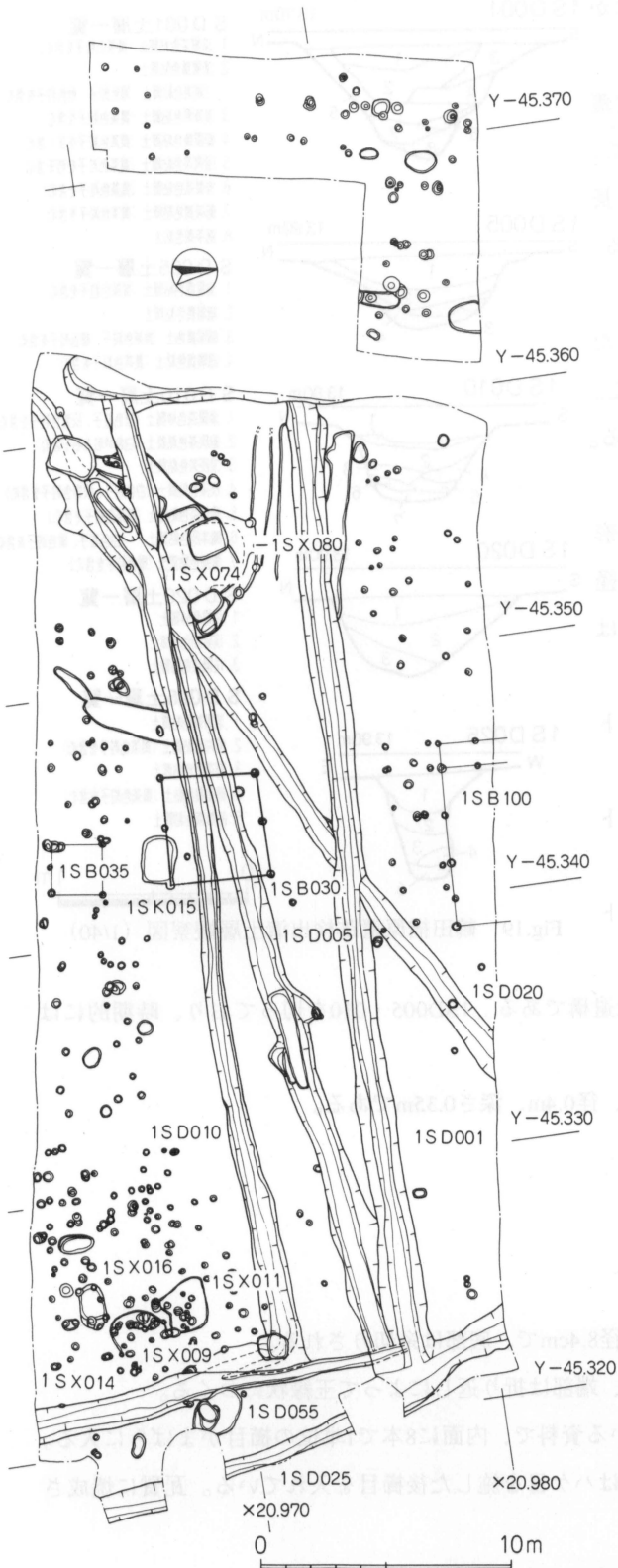


Fig.18 鶴田橋原遺跡遺構配置図 (1/300)

南隅には同様の方向で方形になるピット群が6×5mの範囲に認められ、具体的に復原はできないものの複数回建て替えられた建物の存在が窺える。

溝

1SD001 (Fig.19) 東西方向の溝で検出長38.5m、幅1.1~1.8m、深さ0.6m内外を測る。1SD005より古く位置づけられる。

1SD005 (Fig.19) 西側を1SX074に切れ、1SD001・010よりも古い遺構である。検出長33m、幅1.0~1.8m、深さ0.38mを測る。検出部の中央付近で一段深くなる部分があり、この部分を下層として扱った(遺物取り上げは仮番号S-79)。

1SD010 (Fig.19) 検出長38.8m、幅0.7~1.4m、深さ0.4mを測る。1SD001にほぼ平行しており、互いの心心距離の平均はほぼ6mである。東端で南方へ直角に折れ曲がるが、1SD055に切られているため南北方向の詳細は明らかではない。

1SD020 (Fig.19) 調査区を斜めに貫通する溝で、検出長29.4m、幅0.8~1.1m、深さ0.4mを測る。多数検出された溝の中での切り合い関係では、一番古く位置づけられる。出土遺物が乏しく時期決定は困難である。

1SD025 (Fig.19) 調査区の東端は段落ちになっており、その覆土を除去した段階で検出された南北方向の溝である。検出長13m、幅0.8m程度、深さ0.55mを測る。遺物が乏しく年代決

定の要素を欠いているが、時期的にはかなり新しいものと考えている。

1SD055 (Fig.19) 1SD025のある段落ちに沿うように検出された南北溝で、1SD001・005・010より新しい。検出長15m、幅0.4~1.4m、深さ0.1~0.6mを測る。

土坑

1SK015 1SD010に近接して穿たれた土坑で、埋土中から瓦器碗等が出土した。規模は1.85×1.35m、深さ0.1~0.2mを測る。

その他の遺構

1SX009 調査区東南隅で検出した円形の窪み状遺構である。検出段階では直径2.2mでほぼ正円形を呈していた。深さはきわめて浅い。

1SX011 径0.2m、深さ0.06mのピットである。瓦器碗が出土した。

1SX014 径0.2m、深さ0.38mのピットである。

1SX016 径0.2m、深さ0.25mのピットである。

1SX074 3.7×2.5mで不整形な窪み状遺構である。1SD005・010を切っており、時期的にはかなり下るものである可能性が高い。

1SX080 1SX074に切られるピットで、径0.4m、深さ0.35mである。

3、出土遺物

1SD001出土遺物 (Fig.20・21)

土師器

坏 (1) 口径12.2cm、器高2.4cm、底径8.4cmで、底部は糸切りされる。

鍋 (2・3) いずれも口縁部の破片で、端部は折り返しによって玉縁状につくる。

播鉢 (4) 片口部分が若干残存している資料で、内面に8本で1単位の櫛目がまばらに入る。調整は外面が風化で不明瞭ながら、内面はハケ目を施した後櫛目を入れている。瓦質に焼成される。

鉢 (5) 底部の破片で、糸切り痕が観察される。

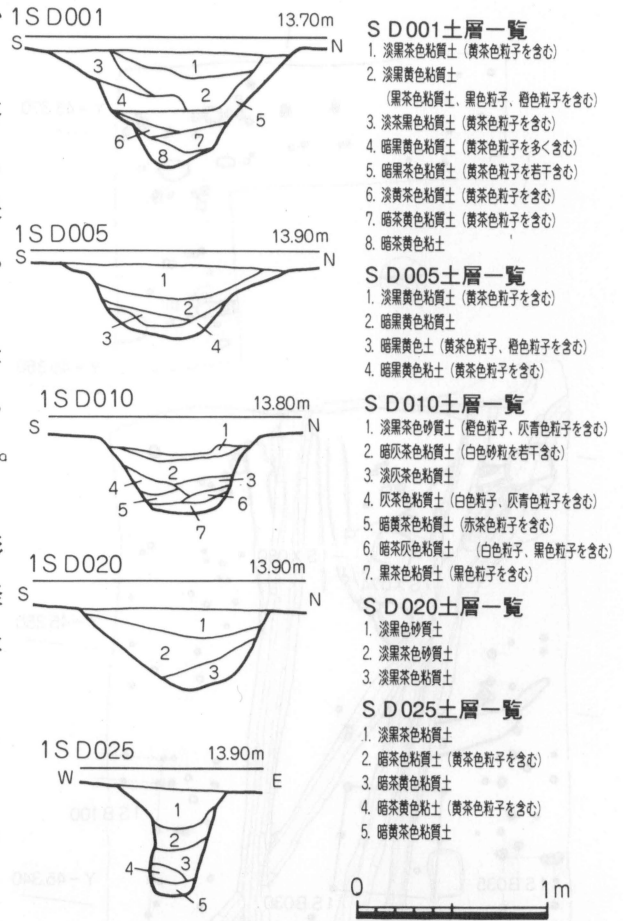
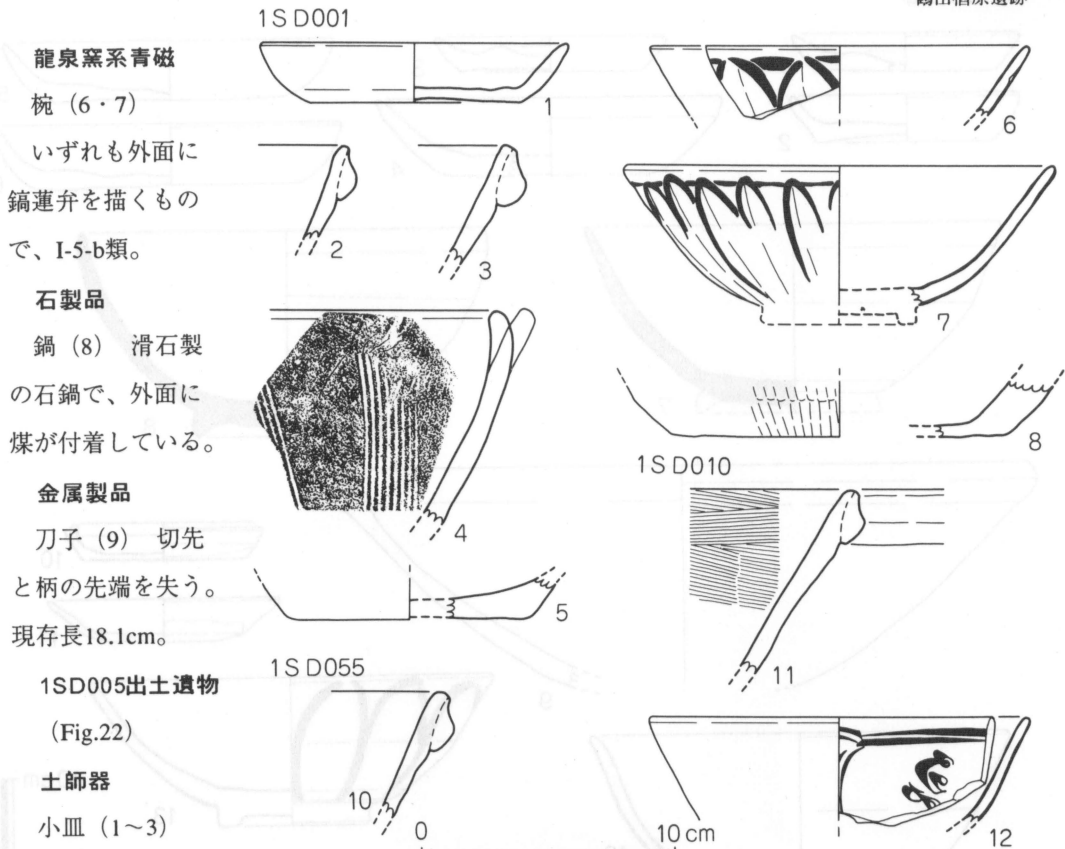


Fig.19 鶴田橋原遺跡検出溝土層観察図 (1/40)



龍泉窯系青磁
碗 (6・7)

いずれも外面に
鎗蓮弁を描くもの
で、I-5-b類。

石製品

鍋 (8) 滑石製
の石鍋で、外面に
煤が付着している。

金属製品

刀子 (9) 切先
と柄の先端を失う。
現存長18.1cm。

1SD005出土遺物

(Fig.22)

土師器

小皿 (1~3)

口径9.0~9.2cm、
器高1.4~1.9cm。

底部は糸切りされる。

坏 (4~6) 口径13.0
~13.8cm、器高2.4~
3.1cm。底部は糸切りさ
れる。

瓦器

碗 (7・8) 口径16.5・16.4cm、器高7.2・8.2cmを測る。いずれも高台を有する資料である。7は高台を除いてほぼ完存するが残念ながら風化が著しく調整は明らかではない。8は見込み部分に布目痕跡が観察される。

鉢 (9) 口径は28.2cmに復原される。赤褐色を呈し土師質に焼成されるが、器形は須恵器の鉢に似る。胎土も他の土師器の鉢や鍋に比べると精良であり、須恵器の還元不良品である可能性も考えておきたい。

青白磁

合子 (10) 受け部の外径7.8cm、口径7.0cm、器高1.5cmを測る。口縁部周辺と外底部は施釉されない。体部の中程に小さな段を有する以外は特に文様もない。釉は淡緑白色に発色し、

Fig.20 鶴田柵原遺跡溝出土遺物実測図 (1/3)

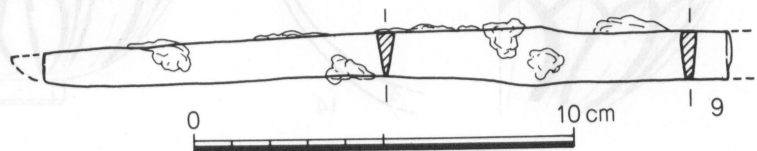


Fig.21 鶴田柵原遺跡出土鉄器実測図 (1/2)

鶴田榑原遺跡

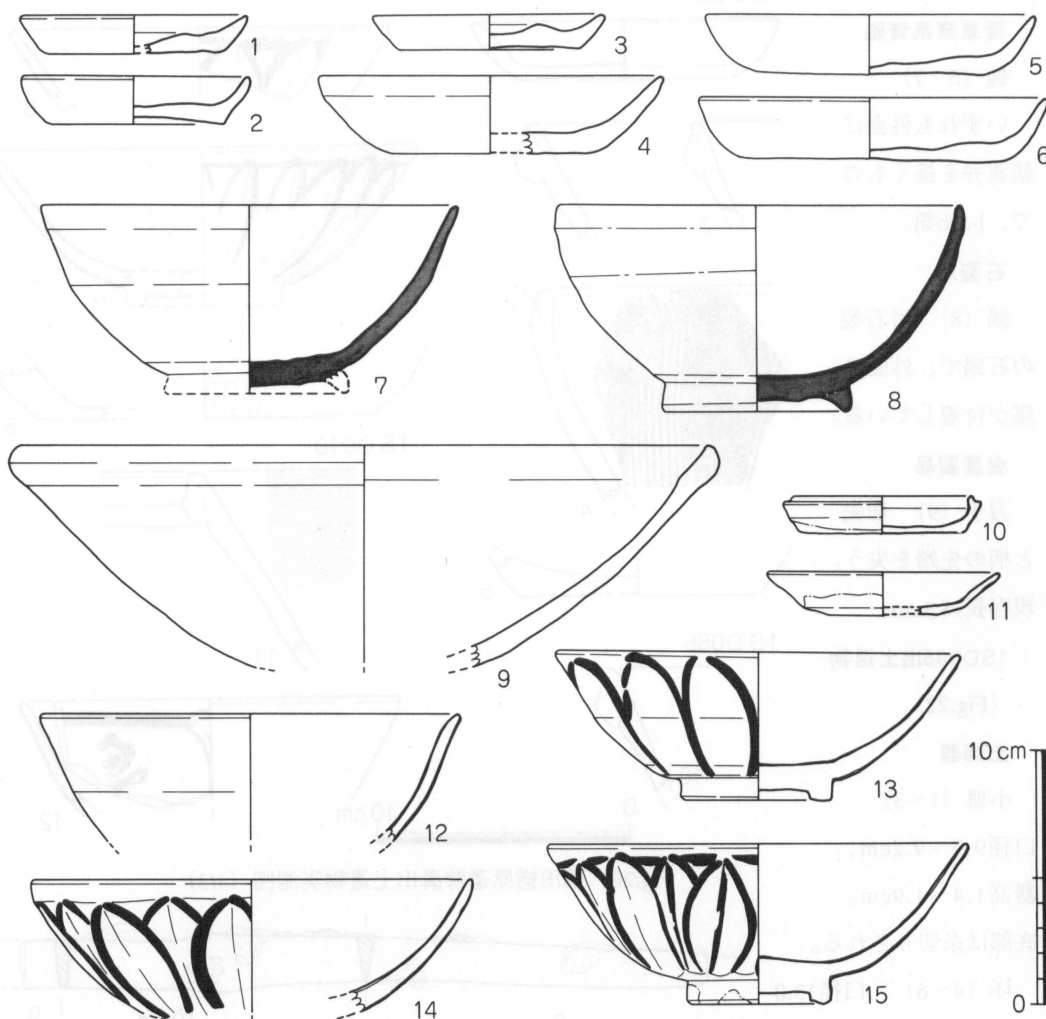


Fig.22 鶴田榑原遺跡ISD005出土土器実測図 (1/3)

光沢がある。内外面ともに貫入が目立つ。

同安窯系青磁

皿 (11) 口径9.2cm。外面の体部中程以下には施釉されない。釉は暗緑灰色で光沢がある。内面の一部に貫入がある。

龍泉窯系青磁

碗 (12~15) 12は内外面ともに無文で、I-I類。13は蓮弁文を施すが弁に稜がないタイプ。14・15は鎬蓮弁である。15は高台置付と外面底部には施釉されない。

ISD010出土遺物 (Fig.20)

土師器

鍋 (11) 端部を玉縁状に作り、内面はハケ目調整で仕上げる。外面に煤が付着している。

龍泉窯系青磁

椀 (12) 口径13.0cmを測り、内面にヘラによる文様を入れる。I-4類。

1SD055出土遺物 (Fig.20)

土師器

鍋 (10) 端部を玉縁状に作り、内面はハケ目調整で仕上げる。

1SK015出土遺物 (Fig.23)

土師器

鍋 (2~6) いずれも口縁部を外方へ折り曲げ、端部を平坦にしたもので、平坦部には初殻

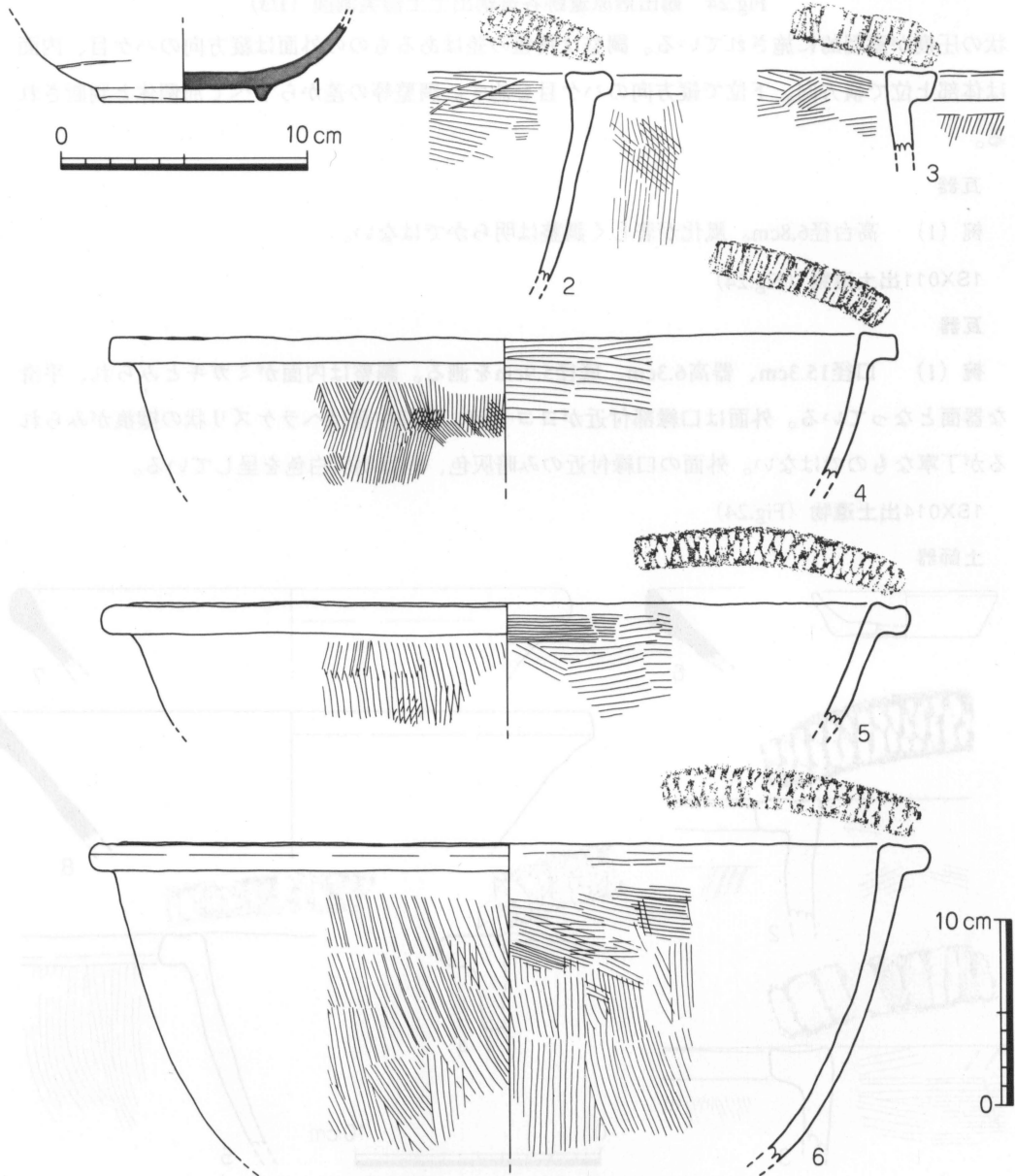


Fig.23 鶴田植原遺跡1SK015出土土器実測図 (1/3・1/4)

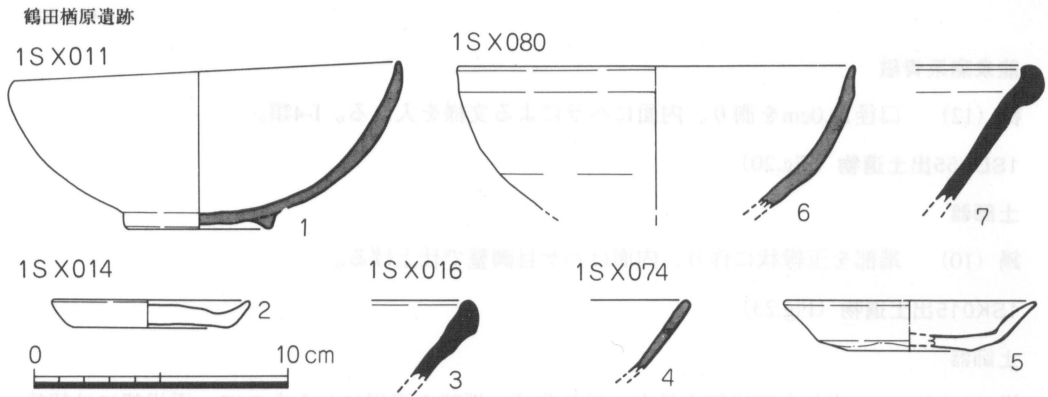


Fig.24 鶴田榑原遺跡各遺構出土土器実測図 (1/3)

状の圧痕が意図的に施されている。調整は精粗の差はあるものの外面は縦方向のハケ目、内面は体部上位で横方向、下位で縦方向のハケ目を施す。調整等の差からすべて別個体と判断される。

瓦器

碗 (1) 高台径6.8cm。風化が著しく調整は明らかではない。

1SX011出土遺物 (Fig.24)

瓦器

碗 (1) 口径15.3cm、器高6.3cm、底径5.9cmを測る。調整は内面がミガキとみられ、平滑な器面となっている。外面は口縁部付近がヨコナデ、体部中程はヘラズリ状の擦痕がみられるが丁寧なものではない。外面の口縁付近のみ暗灰色、他は明灰白色を呈している。

1SX014出土遺物 (Fig.24)

土師器

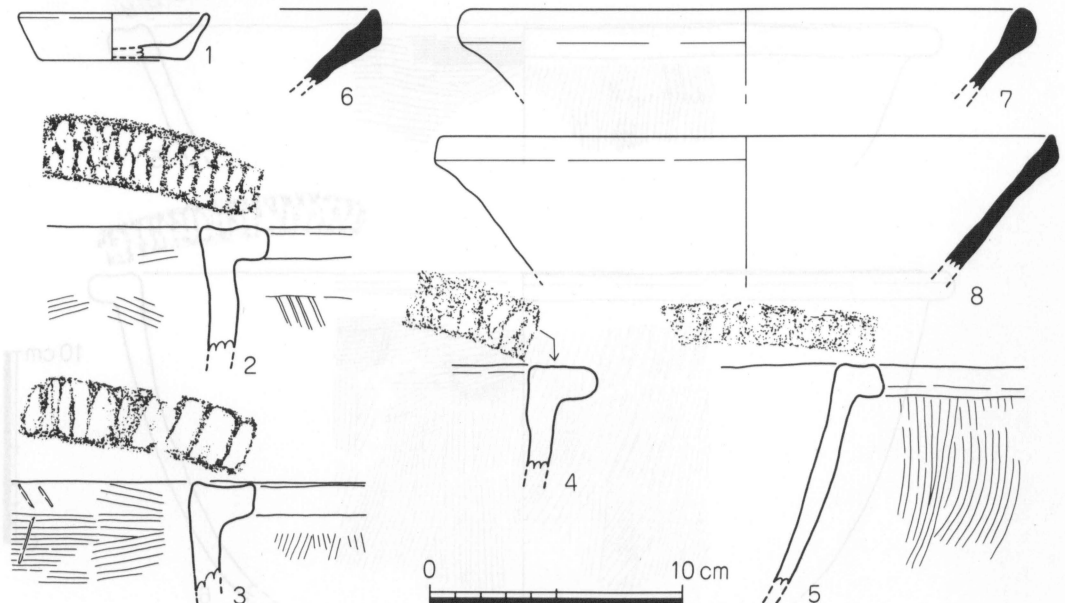


Fig.25 鶴田榑原遺跡表土出土土器実測図 (1/3)

小皿 (2) 口径7.8cm、器高1.0cm、底径6.0cm。底部は糸切りである。

1SX016出土遺物 (Fig.24)

須恵器

鉢 (3) 口縁部を肥厚させ、玉縁状に作る。

1SX074出土遺物 (Fig.24)

瓦器

椀 (4) 瓦器で報告するが硬く焼き締まった焼成良好な資料である。内面はミガキが施されたらしく平滑であるが、外面は強い条痕の残るヨコナデで仕上げられる。胎土も精良である。

同安窯系青磁

皿 (5) 口径10.0cm、器高2.0cm。外面の体部下半から底部は施釉されない。釉は淡緑灰色で光沢がある。一部に貫入がある。

1SX080出土遺物 (Fig.24)

瓦器

椀 (6) 口径15.7cmに復原される。内面はかなり平滑に仕上げられている。

須恵器

鉢 (7) 口縁部内面を僅かに窪ませるが外面は逆に肥厚化させ玉縁状とするものである。

表土出土遺物 (Fig.25)

土師器

小皿 (1) 口径9.6cm、器高1.9cmで、底部は糸切りされる。やや深手のタイプである。

鍋 (2~5) いずれも口縁部を外方へ折り曲げ、端部を平坦にしたもので、平坦部には靱殻状の圧痕が意図的に施されている。調整は精粗の差はあるものの外面は縦方向のハケ目、内面は体部上位で横方向、下位で縦方向のハケ目を施す。なお4は風化が進行し調整不明。

須恵器

鉢 (6~8) 口縁部の細片で、7は口径23.0cm、8は24.6cmを測る。

その他の出土遺物

土製品 (Fig.26)

土錘 (1~5) 完存する資料は4のみであるが、いずれも直径1cm内外で、中央に0.2~0.3cmの穿孔がある。土師質に焼成される。

調整は風化が進行し不明である。

石器 (Fig.27)

石鏃 (1) サヌカイト製で、尖端を欠損した剥片鏃で、二等辺三角形を呈する。やや薄い剥片を素材とし、両面に大きく剥離面を残す。ISD005出土。

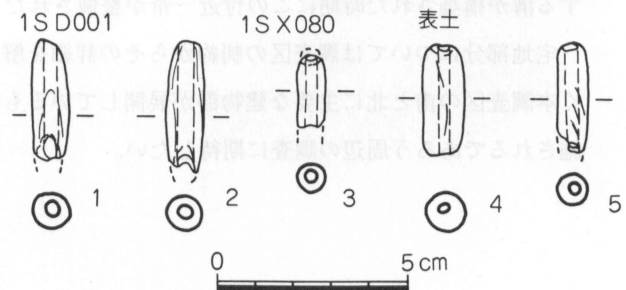


Fig.26 鶴田柵原遺跡出土土錘実測図 (1/2)

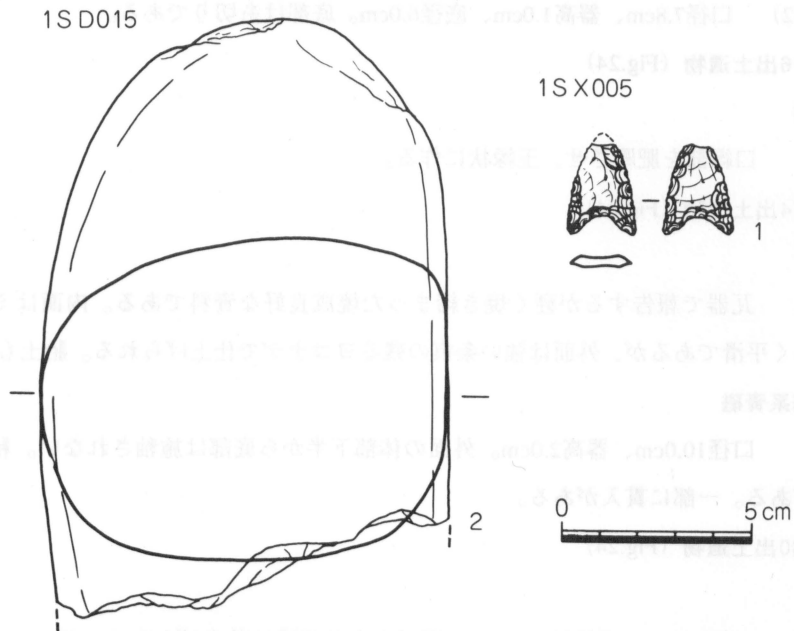


Fig.27 鶴田榎原遺跡出土石器・石製品実測図 (1/2)

敲石 (37) 安山岩製の敲石で、周辺に敲打痕が著しく認められる。一部に摺痕も認められ、摺石としても利用している。1SK015出土。

4、小結

今回検出した遺構群の主体は、その出土遺物から13世紀後半から14世紀前半頃のものと考えられる。なかでも数本検出された溝は、その周囲で掘立柱建物や土坑が検出されていることから土地を区画する性格を有していたものと推定される。なかでも1SD001と010とはほぼ同時期の所産とみられ、両者がほぼ並行していることから、これに挟まれた空間が通路として利用されていた時期があるものと思われる。このように考えるとピット群等の存在から、調査区の北側と南側は宅地として利用されていたことが窺える。

検出されたピット群はほぼこの両溝の方向性に左右されているものと考えられ、斜めに走る1SD005や020はいずれも切り合い関係では前記の溝よりも古く位置づけられることから、並行する溝が構築された時期にこの付近一帯が整備されたものと理解できよう。

宅地部分については調査区の制約からその詳細を解明するまでには至らなかったが、おそらく本調査区の南と北に主要な建物群が展開しているものと予想される。これらの解明は将来実施されるであろう周辺の調査に期待したい。

(4) 鶴田岸添遺跡 第1次調査

1. はじめに

今回の調査では竪穴住居1棟、溝3条、落とし穴状遺構などを検出した。報告に際して遺構番号は調査段階での仮番号を生かし、遺構の種別記号（SD・SXなど）の前に調査次数を冠することで将来の同遺跡の調査における遺構番号との重複を避けた。

ex. 第1次調査のS-1が溝であった場合、1SD001となる。

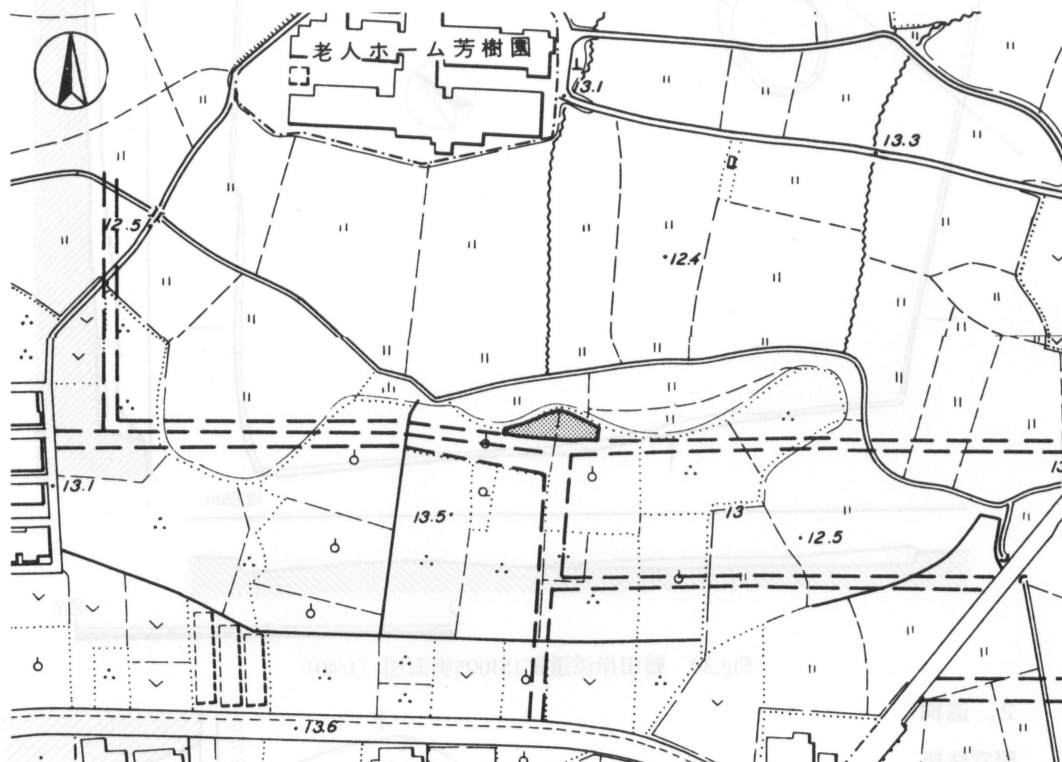


Fig.28 鶴田岸添遺跡調査地点位置図 (1/2500)

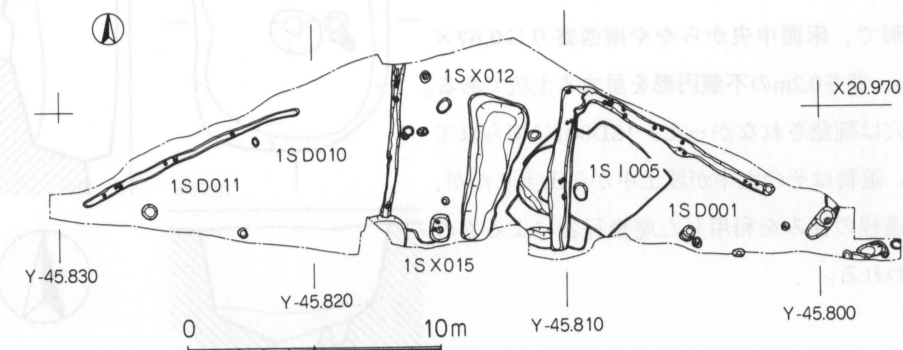


Fig.29 鶴田岸添遺跡遺構配置図 (1/300)

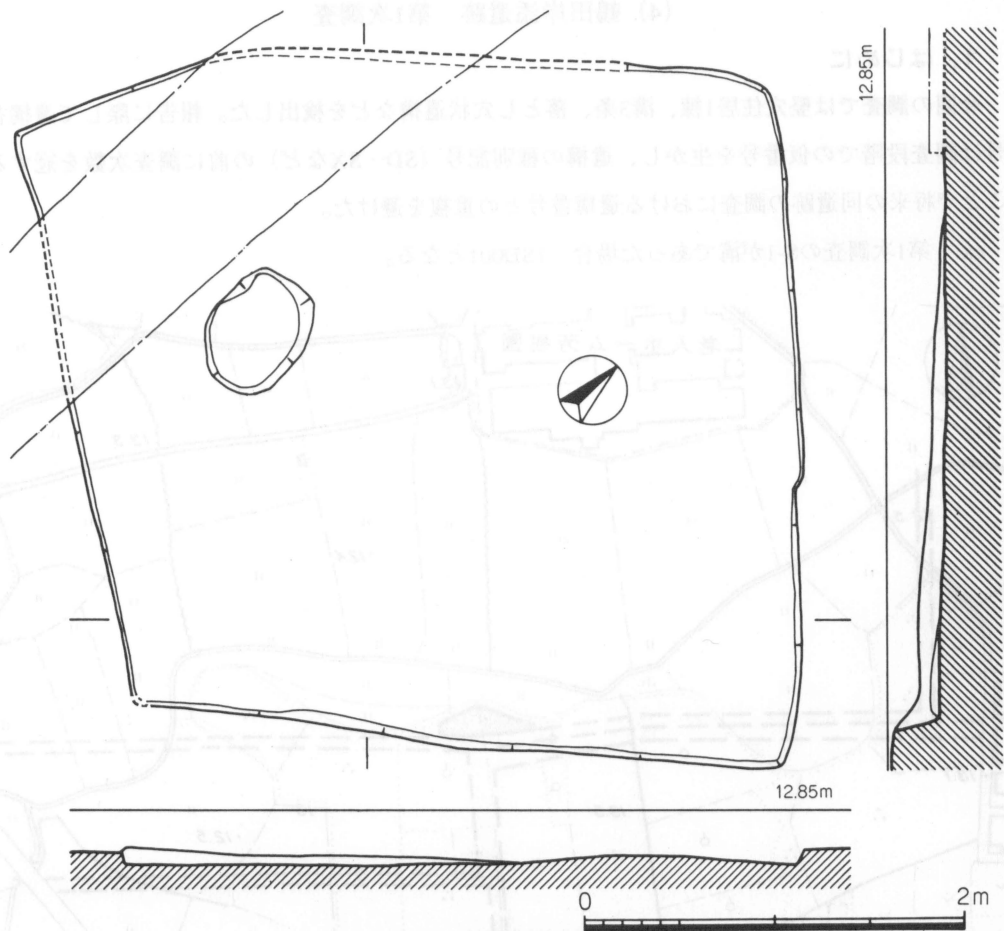


Fig.30 鶴田岸添遺跡1SI005実測図 (1/40)

2、遺構

竪穴住居

1SI005 (Fig.30) 3.83×3.65m、深さは残りが最も良いところで0.23mを測る。平面の形状は略方形で、床面中央からやや南西寄りに0.67×0.55m、深さ0.2mの不整円形を呈する土坑である。支柱穴は確認されなかった。1SD001に切られている。遺物はその大半が埋土中から出土したが、埋没過程の窪みを利用した廃棄行為によるものと思われる。

溝

1SD001 鉤型に折れ曲がっている溝で、検出総長15.5m、幅0.35～0.8m、深さ0.05～0.20mを測

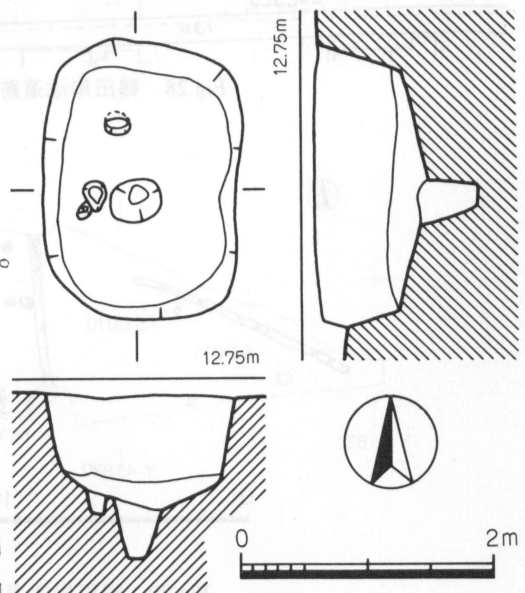


Fig.31 鶴田岸添遺跡1SX015実測図 (1/30)

る。1SI005を切っている。出土遺物は弥生土器が主体であるが、時期が下る可能性もある。

1SD010 南北方向の溝である。検出長6.0m、幅0.3～0.5m、深さ0.05～0.15mで、北側は調査区外に延びている。調査区の範囲内で溝の底部の標高は北側が低い。

1SD011 北に対して東へ大きく振っている溝で、長さ9.2m、幅0.3m、深さ0.02～0.20mを測る。

その他

1SX012 南北5.7m、東西の最大長2.3m、深さは最大で0.6mを測る不整形な土坑状を呈している。

1SX015 (Fig.31) 落とし穴とみられ、南北1.1m、東西0.77m、遺構の床面までの深さは最大で0.45mを測り隅丸長形状を呈している。遺構の底部に小ピットが数個検出されているが、

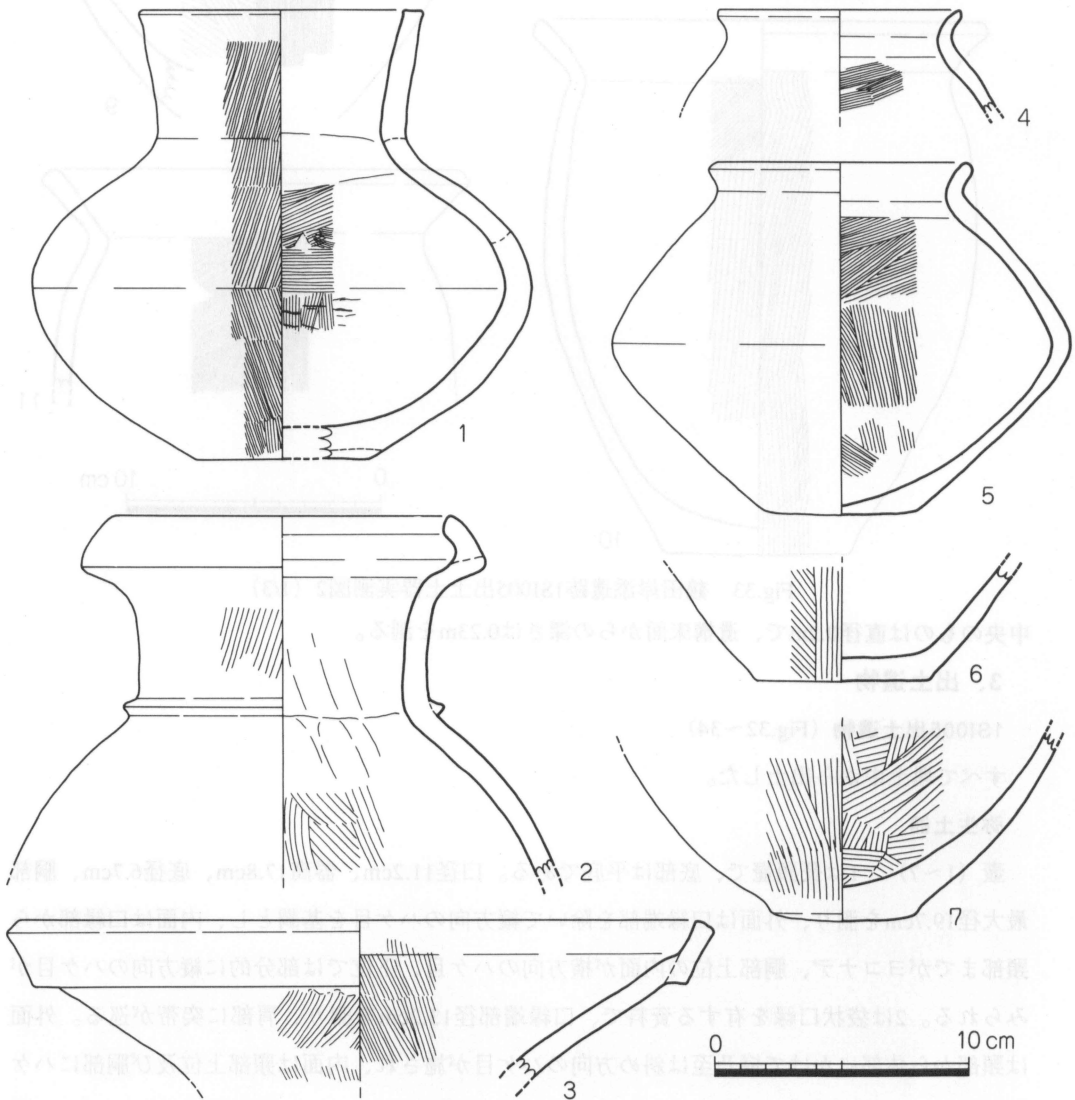


Fig.32 鶴田岸添遺跡1SI005出土土器実測図1 (1/3)

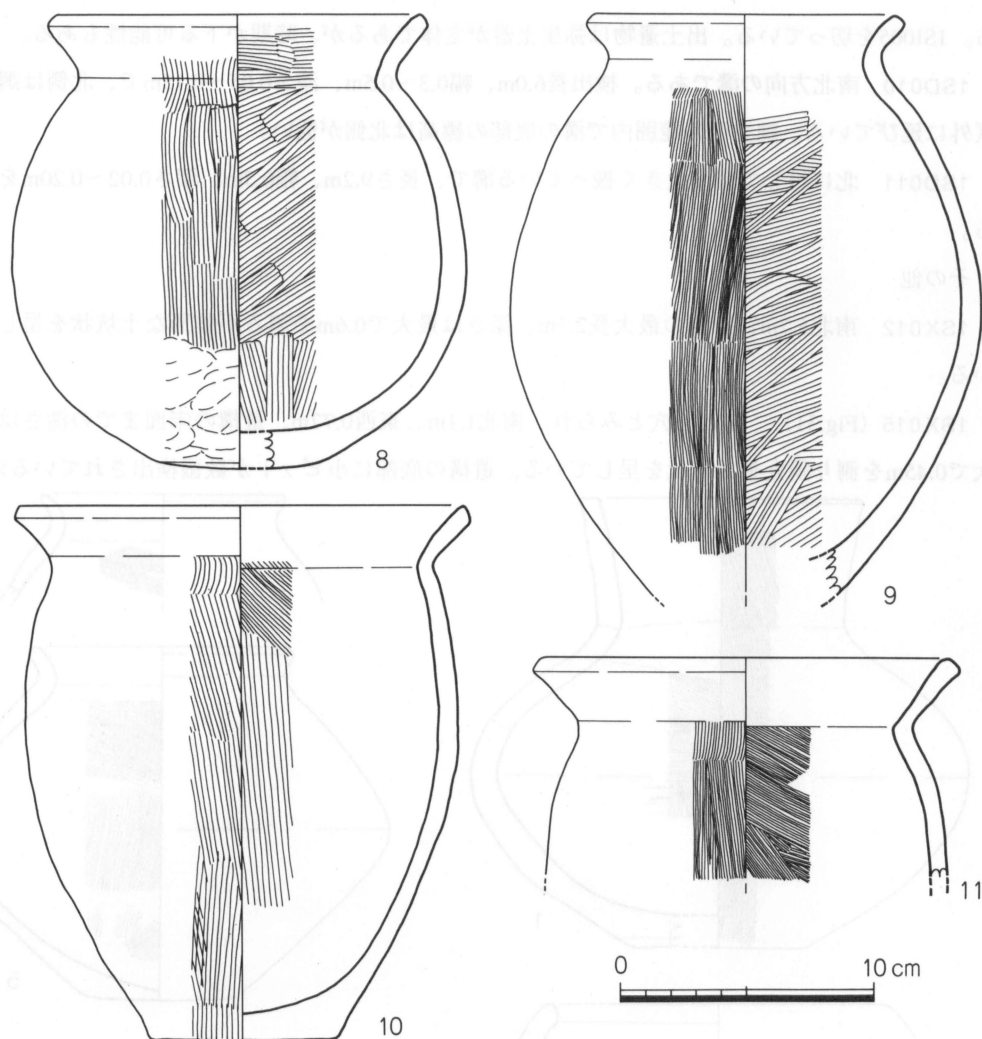


Fig.33 鶴田岸添遺跡1SI005出土土器実測図2 (1/3)

中央のものは直径0.2mで、遺構床面からの深さは0.23mを測る。

3、出土遺物

1SI005出土遺物 (Fig.32~34)

すべて埋土中から出土した。

弥生土器

壺 (1~7) 1は長頸壺で、底部は平底である。口径11.2cm、器高17.8cm、底径6.7cm、胴部最大径19.7cmを測り、外面は口縁端部を除いて縦方向のハケ目を基調とし、内面は口縁部から頸部までがヨコナデ、胴部上位の内面が横方向のハケ目、下位では部分的に縦方向のハケ目が見られる。2は袋状口縁を有する資料で、口縁端部径13.2cmを測り、肩部に突帯が巡る。外面は頸部から体部にかけて縦乃至は斜め方向のハケ目が施され、内面は頸部上位及び胴部にハケ目が見られる。突帯は貼付によるため、その周囲にはヨコナデが確認される。3は口径

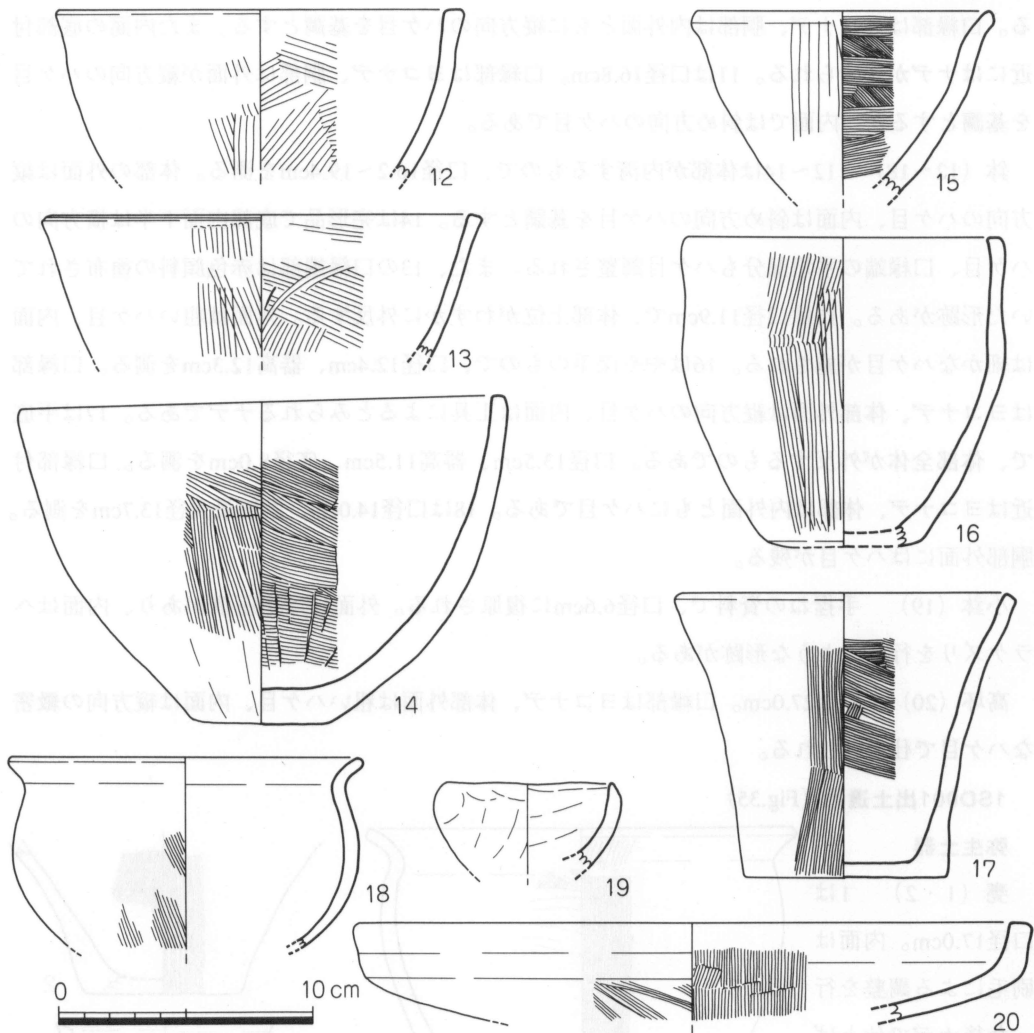


Fig.34 鶴田岸添遺跡1SI005出土土器実測図3 (1/3)

28.0cm。内外面ともにハケ目調整される。4は口径9.6cmで口縁部はヨコナデ、体部は内外面ともにハケ目である。5は平底を呈するもので、口径10.4cm、器高14.0cm、底径6.0cm、胴部最大径18.0cmを測る。口縁部付近はヨコナデ、胴部及び底部の外表面はナデとみられ、内面は全体にわたってハケ目調整される。6・7は底部の資料で、底径7.0・5.6cm。外面はいずれもハケ目調整されるが、6の内面は工具によるとみられるナデ調整で仕上げられる。

甕 (8~11) 8は口径15.0cm、器高18.1cm、胴部最大径18.0cm、わずかに平底を呈する底部は径6.3cmである。口縁端部はヨコナデ、他はハケ目調整を基調とするが、胴部外面下半はナデにより平滑にされ、ミガキのようにも見受けられる。9は口径12.6cm、胴部最大径18.6cm、現存高23.1cmを測る。肩部から口縁部にかけては内外面ともにヨコナデ、胴部の外面は縦方向のハケ目、内面は横乃至は斜め方向のハケ目である。外面のハケ目はきわめて細かなものである。10は平底を呈する資料で、口径18.0cm、器高21.2cm、底径9.3cm、胴部最大径17.0cmを測

る。口縁部はヨコナデ、胴部は内外面ともに縦方向のハケ目を基調とする。また内面の底部付近にはナデが認められる。11は口径16.8cm。口縁部はヨコナデ、胴部は外面が縦方向のハケ目を基調とするが、内面では斜め方向のハケ目である。

鉢 (12~18) 12~14は体部が内湾するもので、口径16.2~19.4cmを測る。体部の外面は縦方向のハケ目、内面は斜め方向のハケ目を基調とする。14は完形品で底部内面下半は横方向のハケ目、口縁端の平坦部分もハケ目調整される。また、13の口縁端部は赤色顔料の塗布されていた形跡がある。15は口径11.9cmで、体部上位がわずかに外反する。外面は粗いハケ目、内面は細かなハケ目が施される。16はやや深手のもので、口径12.4cm、器高12.3cmを測る。口縁部はヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ目、内面は工具によるとみられるナデである。17は平底で、体部全体が外反するものである。口径13.5cm、器高11.5cm、底径8.0cmを測る。口縁部付近はヨコナデ、体部は内外面ともにハケ目である。18は口径14.0cm、胴部最大径13.7cmを測る。胴部外面にはハケ目が残る。

小鉢 (19) 手捏ねの資料で、口径6.6cmに復原される。外面には指圧痕があり、内面はヘラケズリを行ったような形跡がある。

高坏 (20) 口径27.0cm。口縁部はヨコナデ、体部外面は粗いハケ目、内面は縦方向の緻密なハケ目で仕上げられる。

1SD001出土遺物 (Fig.35)

弥生土器

甕 (1・2) 1は口径17.0cm。内面は刷毛による調整を行った後ナデで仕上げる。外面は縦方向のハケ目である。2は平底になる底部片で、底径6.0cm。内

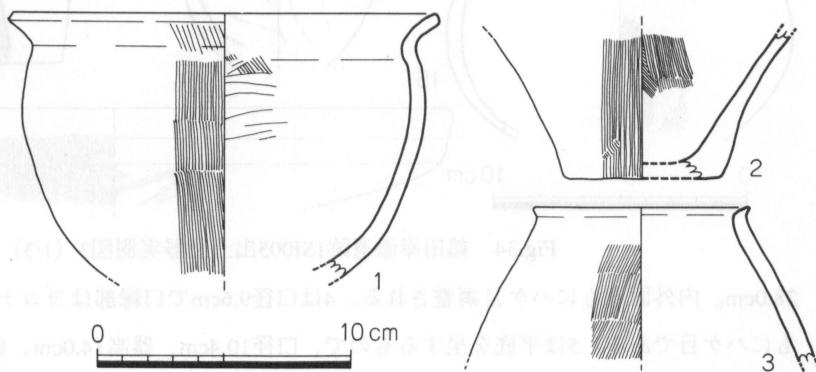


Fig.35 鶴田岸添遺跡1SD001出土土器実測図 (1/3)

外面ともにハケ目調整され、外面のハケ目は底部にまで及んでいる。

壺 (3) 口径8.5cm。口縁端部は外方へわずかにつまみ出す程度でおわる。内面は刷毛による調整を行った後ナデで仕上げる。外面は縦方向のハケ目である。

1SX012出土遺物 (Fig.36)

陶器

椀 (1) 高台径4.0cm。見込みに絵がみられ、暗緑灰色を呈する。釉は明黄茶白色に発色する。高台付近には施釉しない。

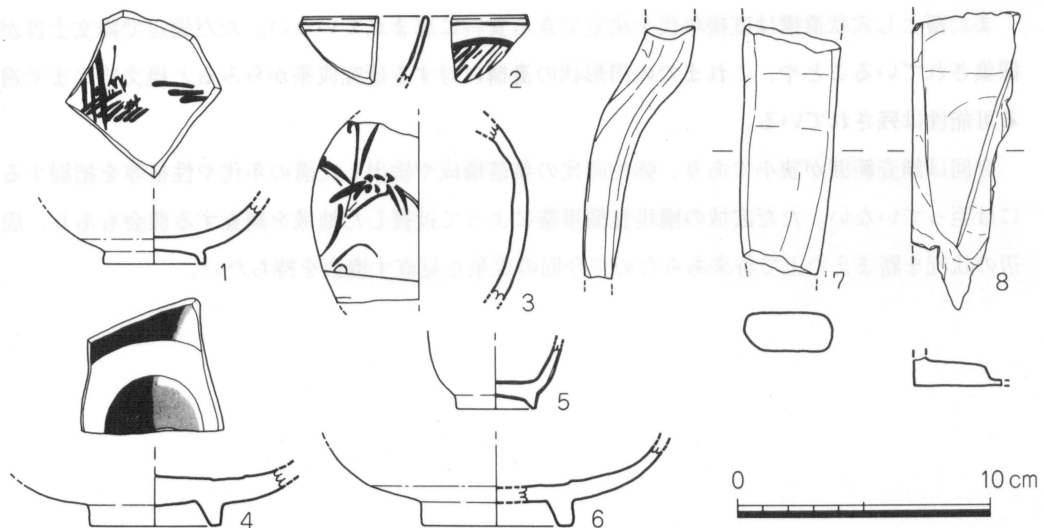


Fig.36 鶴田岸添遺跡1SX012出土土器実測図 (1/3)

染付

椀 (2) 口縁部の小片で、絵は暗青緑色に発色する。

壺 (3) 胴部最大径8.6cm。外面には草花文をあしらい暗青色を呈する。内面には釉はなく回転の速いヨコナデが観察される。

磁器

椀 (4・6) 4は高台径5.2cm。外面下半には釉はなく、内面の釉は暗茶色乃至は茶緑色に発色する。見込みの釉は円形に掻き取られる。6は高台径6.0cm。体部外面上半部と内面に釉がかり暗灰色に発色し光沢がある。見込みは円形に釉を掻き取っている。

小椀 (5) 高台径3.2cmを測る小さなものである。釉は全面に施され、暗白色に発色する。畳付けに砂目が残っている。

土師器

脚 (7) 断面形状が略楕円形を呈するもので、把手の可能性もある。

石製品

硯 (8) 粘板岩製で暗黒灰色を呈している。

4、小結

今回の調査では弥生時代後期の住居跡1棟、近世以降になる土坑状遺構、弥生時代の遺物を多く出土する溝などが検出された。

年代を検討する上で今回提示できた資料は、住居跡出土のものでは住居が廃絶したのち若干の時間を経過してから廃棄された一群と考えられ、少なくともこの土器の示す年代までには廃絶していたとするのが正しい理解であろう。また溝についても注意する必要がある、1SD001の資料は重複する住居跡に本来帰属するものであると考えるべきであり、溝の埋没年代を直接的に示しているとは考えにくい。

また落とし穴状遺構は直接年代を決定できる資料に恵まれていない。ただ周辺で縄文土器が採集されていることや、これまでの同形状の遺構に対する研究成果からみると縄文時代まで遡る可能性は残されている。

今回は調査範囲が狭小であり、弥生時代の集落構成や検出した溝の年代や性格等を把握するには至っていない。ただ広域の圃場整備事業によって近接した地域を調査する機会もあり、周辺の状況を踏まえた上で将来あらためて今回の成果を見直す機会を持ちたい。



(1) 図解 土器土器の位置関係

IV. おわりに

東部地区遺跡群の調査は、今回報告するものがいずれも最初のものであり、圃場整備事業の進行とともに徐々に明らかになってゆくものと思われる。今年度の調査だけでも、個別の遺構や遺物をみると縄文時代から近世までの幅広い時期のものが確認され、圃場整備の終了とともに消滅するものの、明らかにされる筑後市東部の歴史像は現状では想像もつかないほど大きなものであろう。

今後数年間にわたって調査が継続することもあり、この東部地区の遺跡、遺構、遺物等の検討は事業最終年度の報告であらためて検討してみたいと思う。

最後になったが、調査及び整理に際しては、筑後東部地区土地改良区に御協力を頂き、次の方々に有意義な御指示・御教示を賜わった。記して感謝の意を表したい。

伊崎俊秋（福岡県教育庁南筑後教育事務所） 富永直樹（久留米市教育委員会）

柴田剛（財団法人君津郡市文化財センター） 狭川真一・山村信榮（太宰府市教育委員会）

版 圖



新溝丸田遺跡西半部（東から）



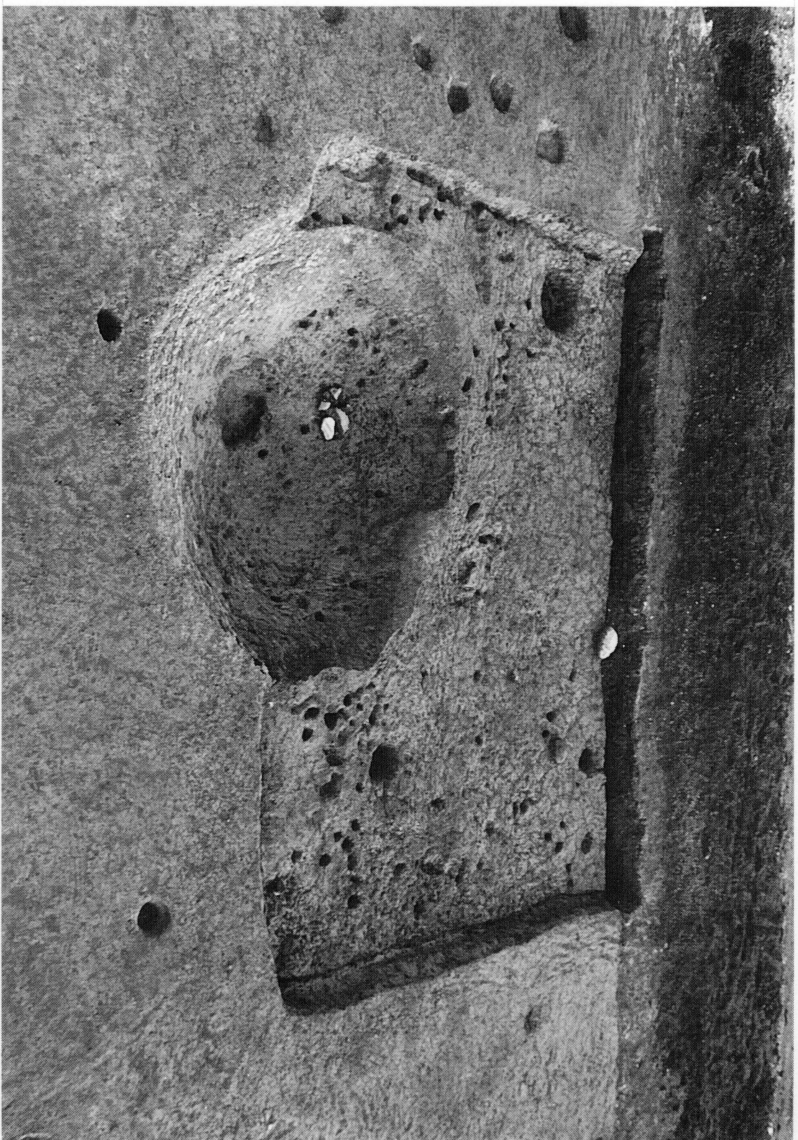
新溝丸田遺跡中央部（西から）



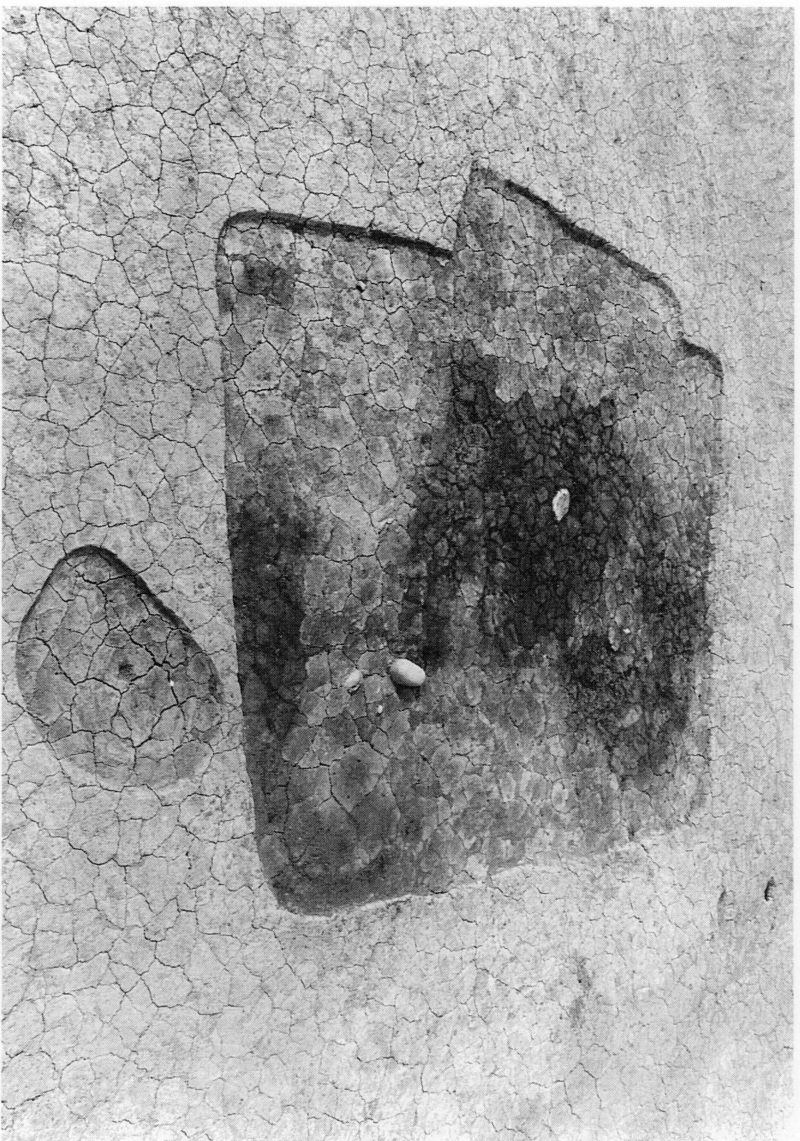
新溝丸田遺跡東半部（東から）



新溝丸田遺跡B区全景（東から）



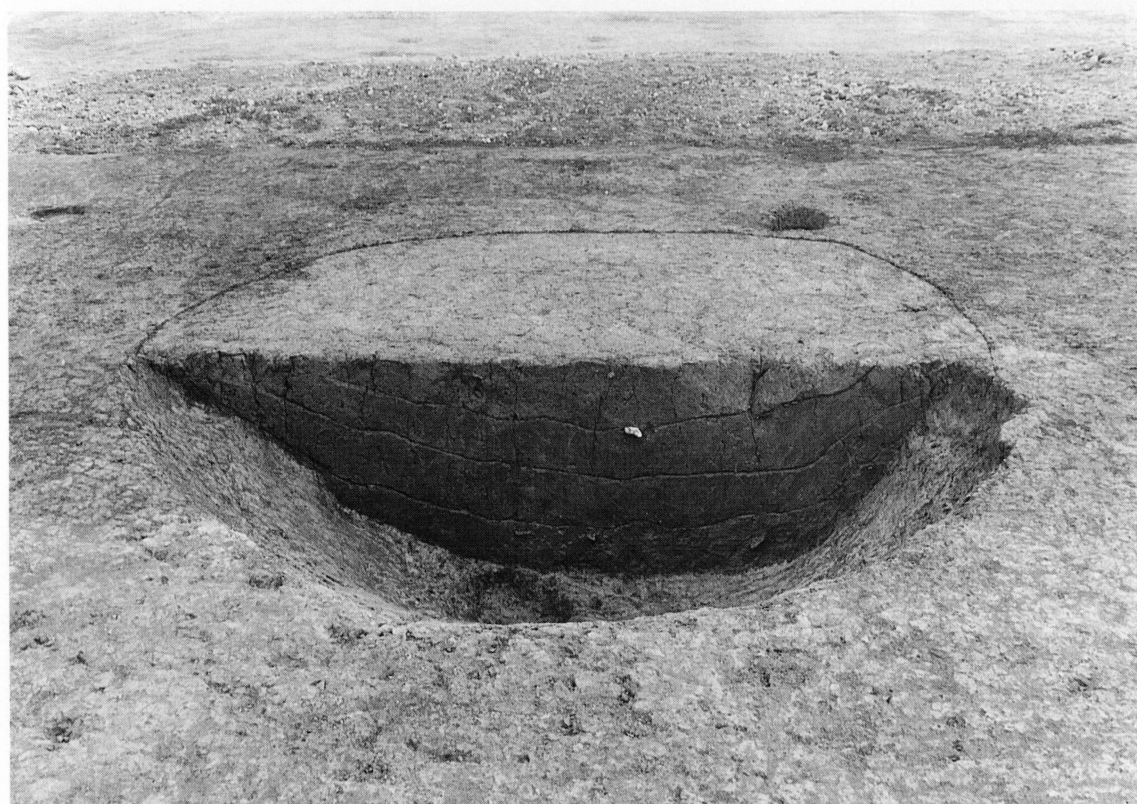
新湍丸田遺跡SI075 (北から)



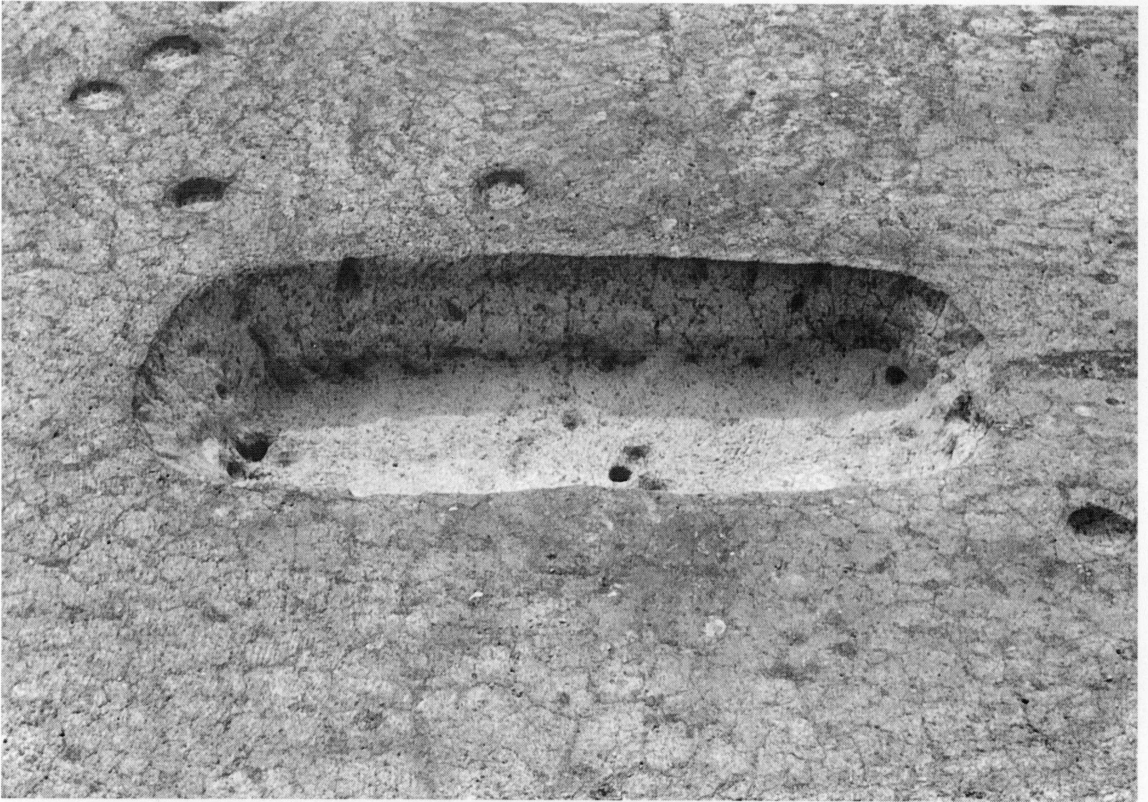
新湍丸田遺跡SI005 (南から)



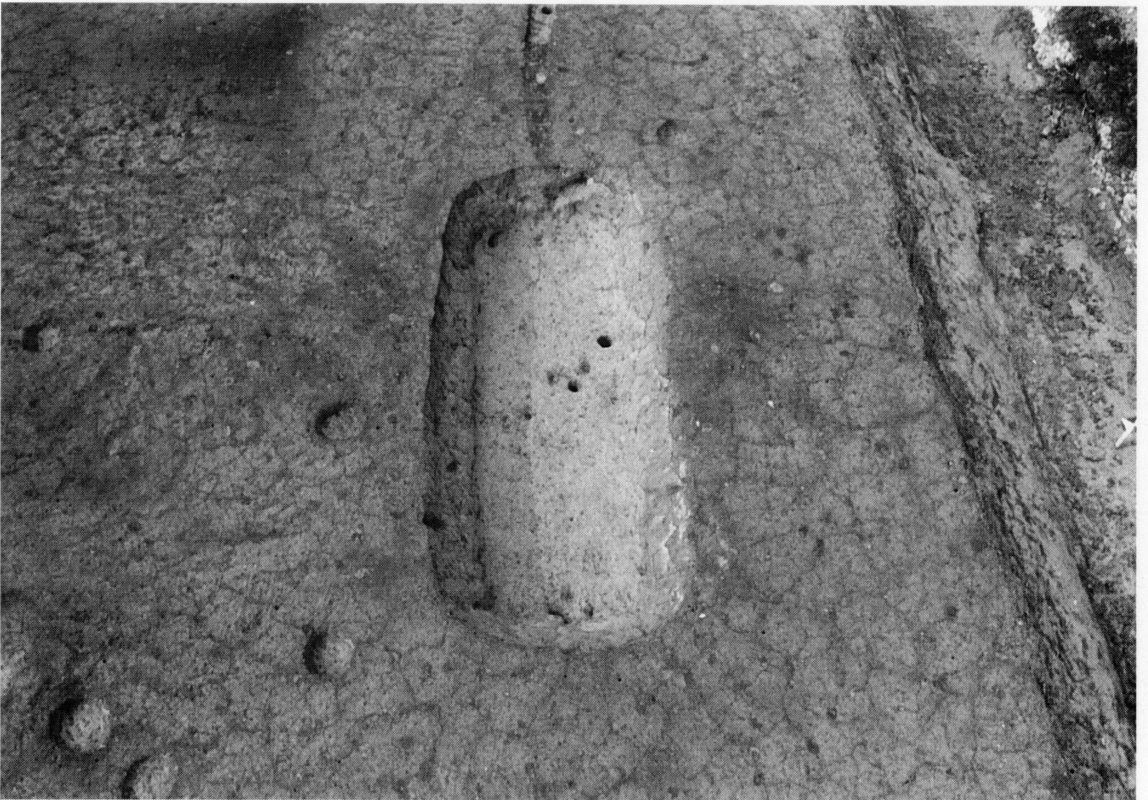
新溝丸田遺跡SK001 (南から)



新溝丸田遺跡SK055 (北から)



新溝丸田遺跡ST080 (北東から)



新溝丸田遺跡ST080 (南東から)

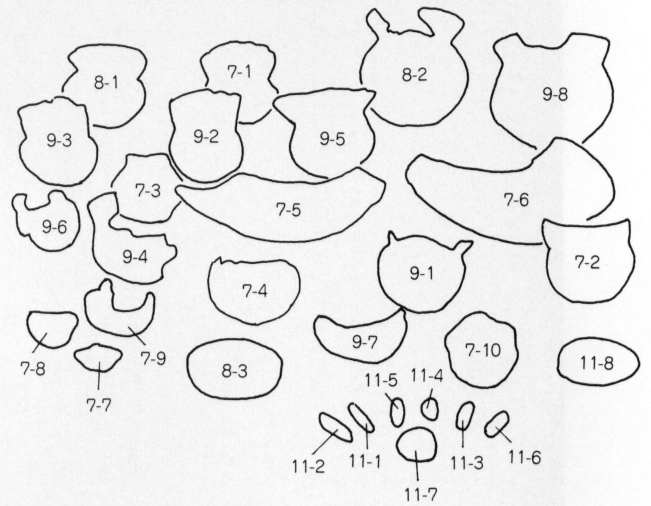


新溝丸田遺跡出土遺物



9-9

新溝丸田遺跡出土遺物



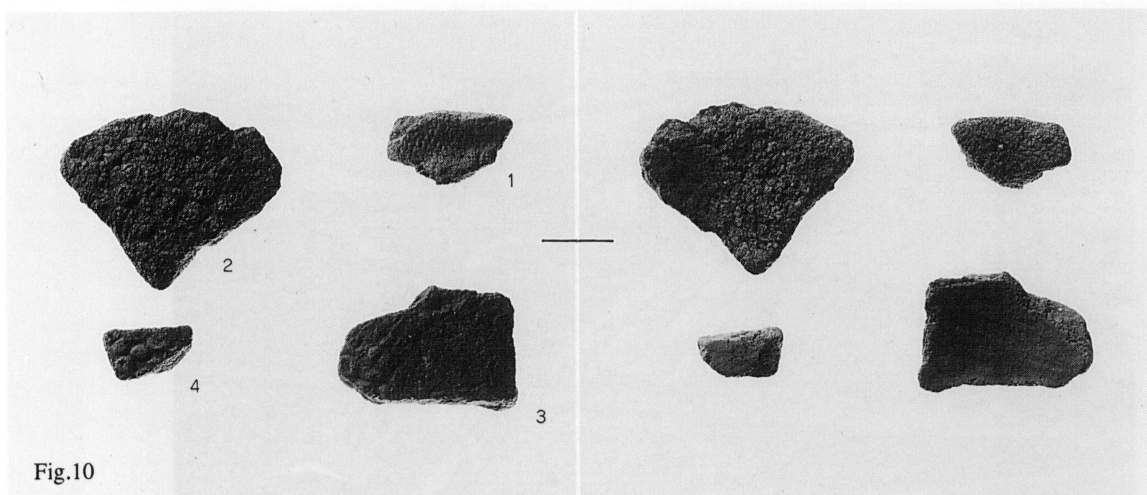


Fig.10

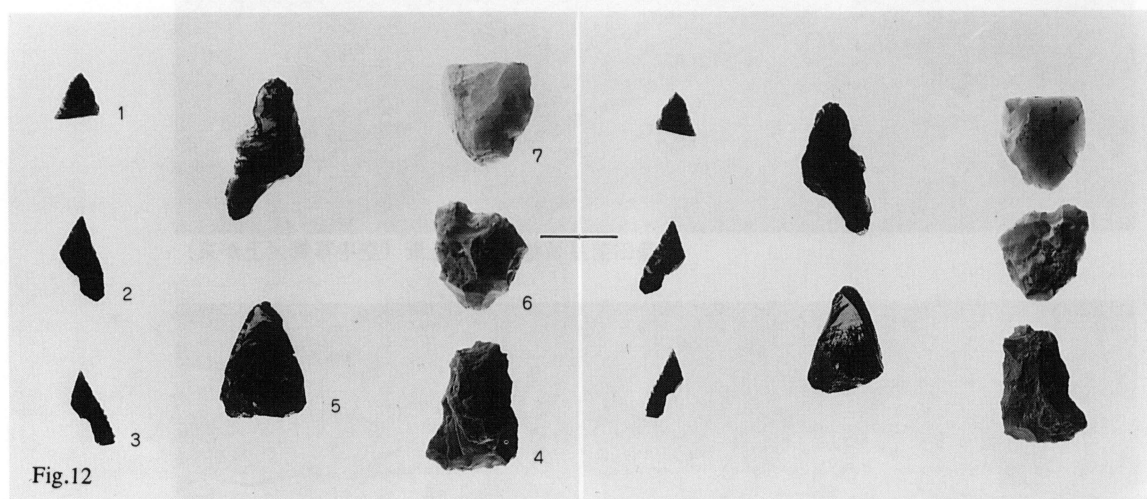


Fig.12

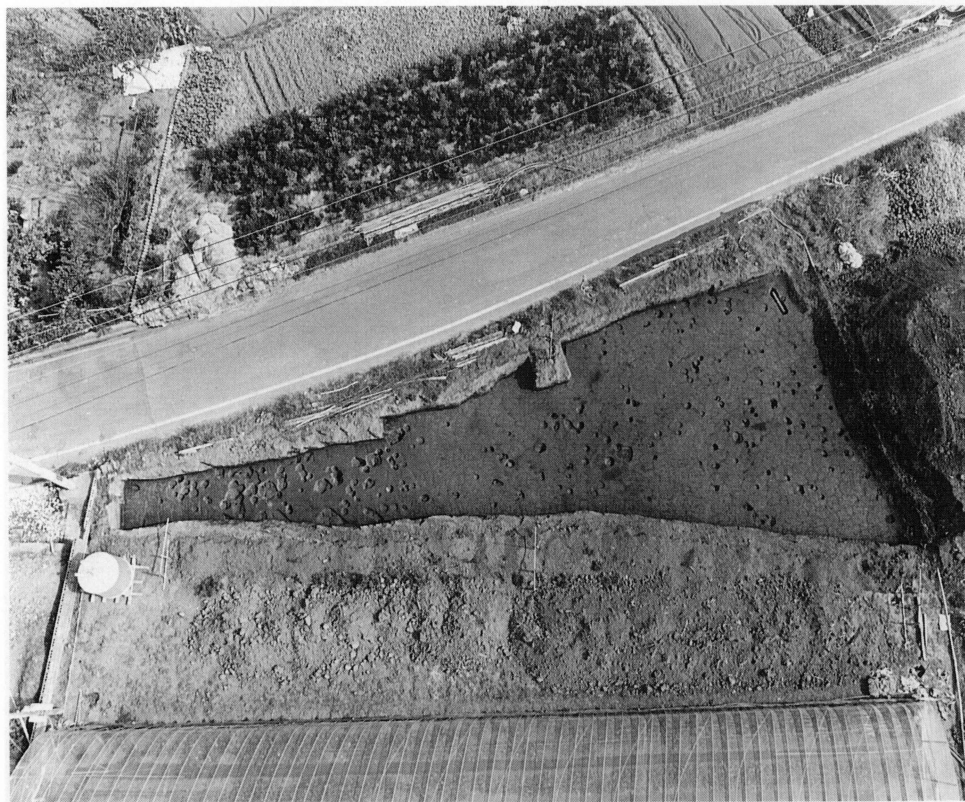
新溝丸田遺跡出土遺物



鶴田前島遺跡調査地全景（空中写真／上が東）



鶴田前島遺跡調査地全景（空中写真／上が東）



鶴田前島遺跡A区全景（空中写真／上が東）



鶴田前島遺跡B区全景（空中写真／上が東）



鶴田榑原遺跡調査地全景（空中写真／上が北）



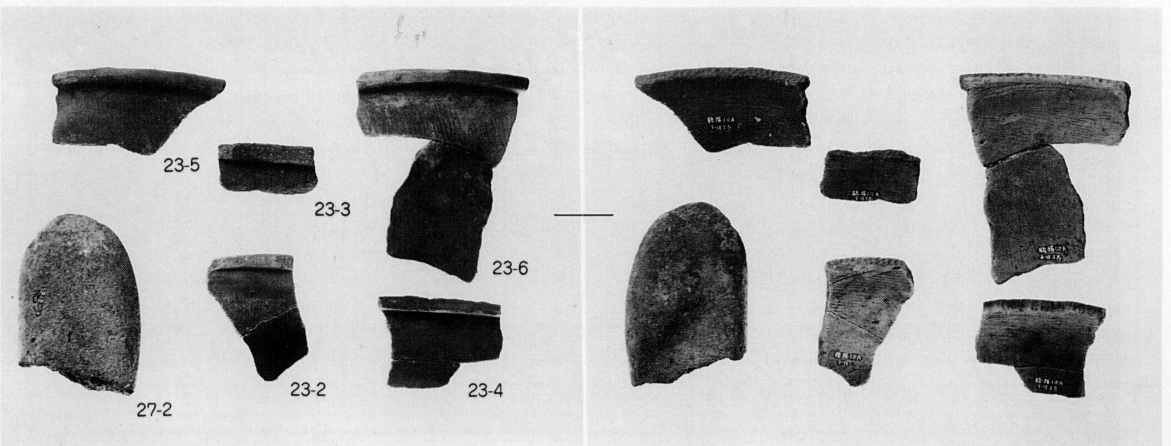
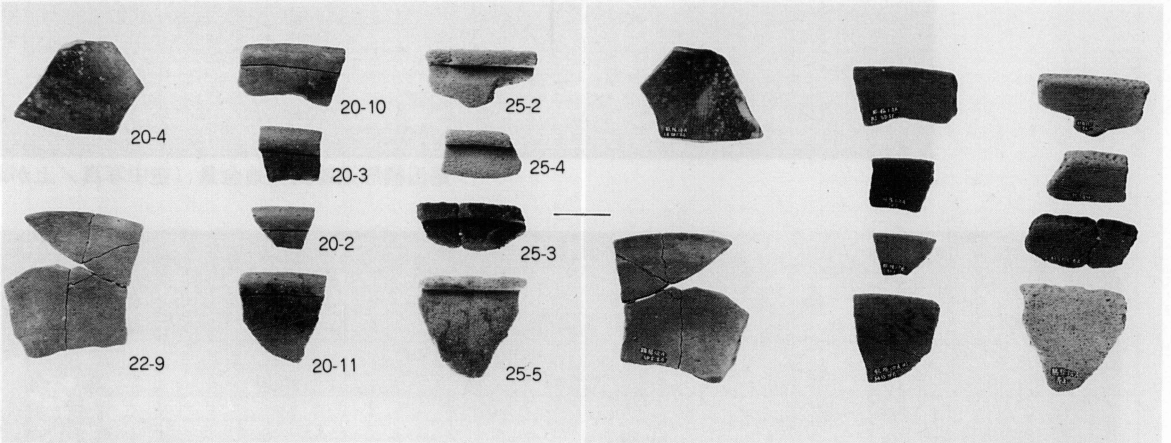
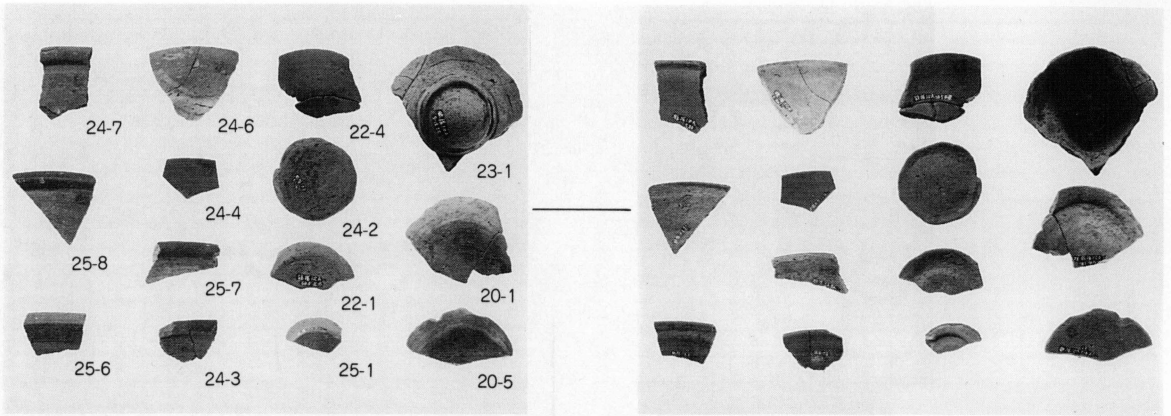
鶴田榑原遺跡調査地全景（空中写真／上が北西）

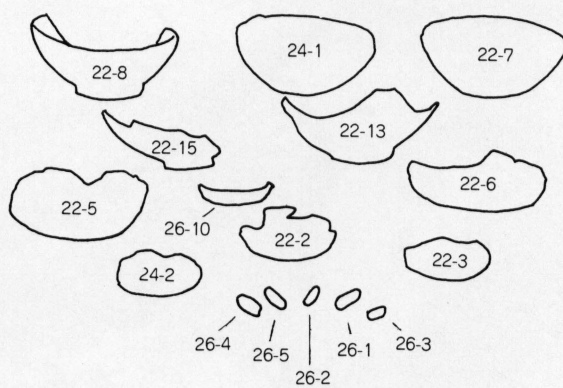
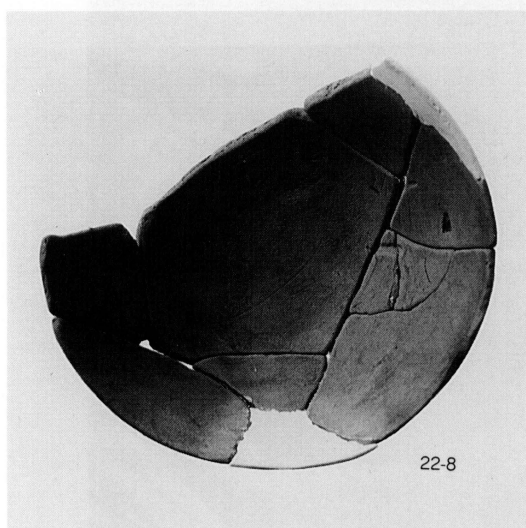
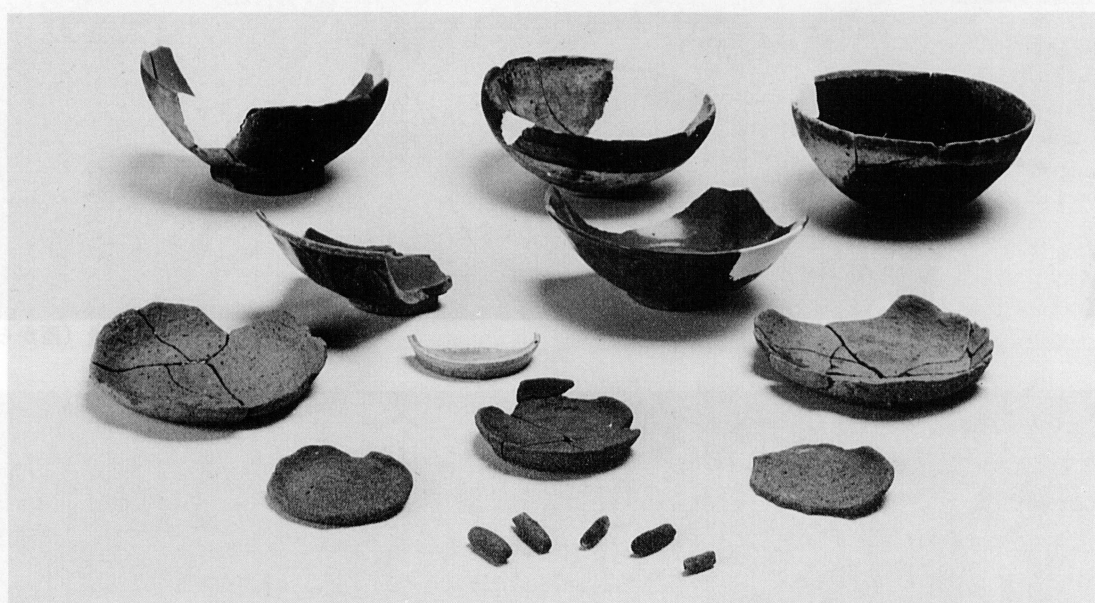
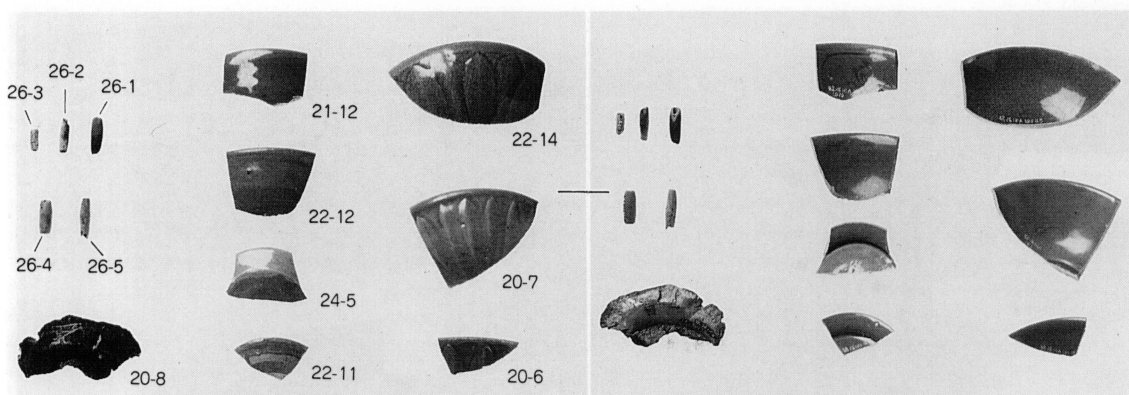


鶴田栢原遺跡調査地全景（空中写真／上が北）



鶴田栢原遺跡1SX080（東から）



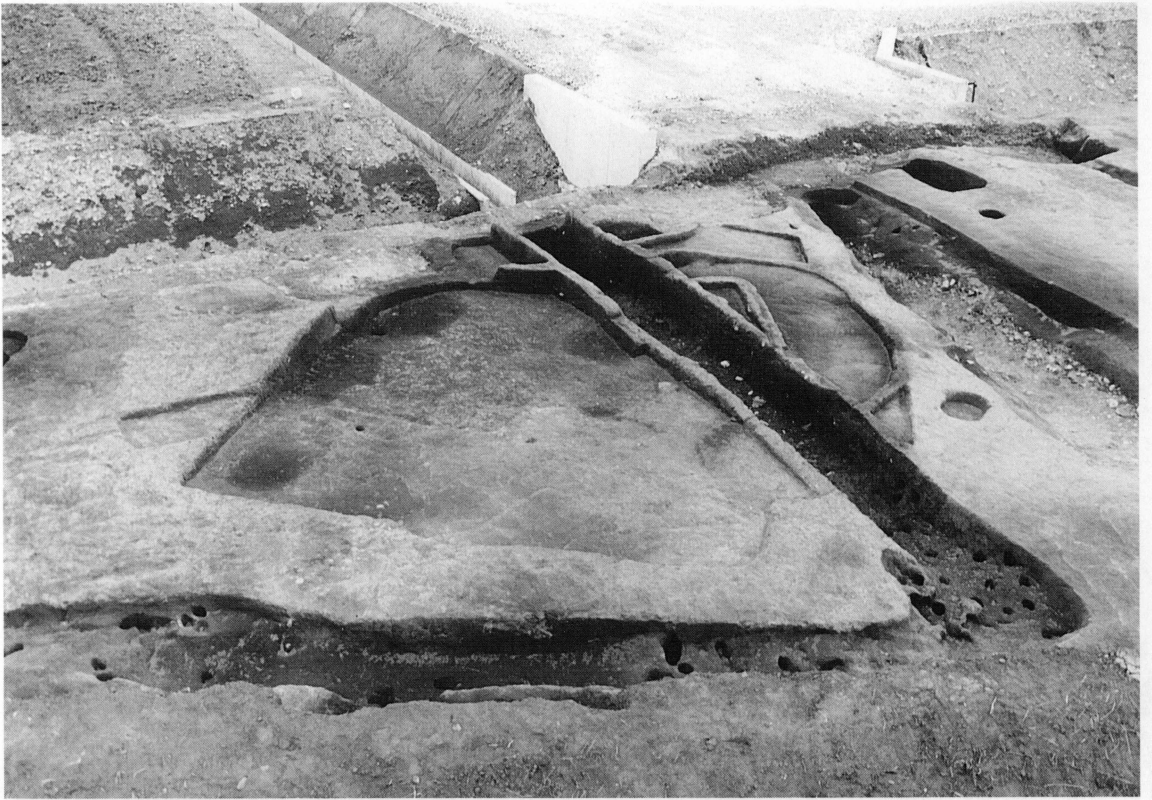




鶴田岸添遺跡全景（西から）

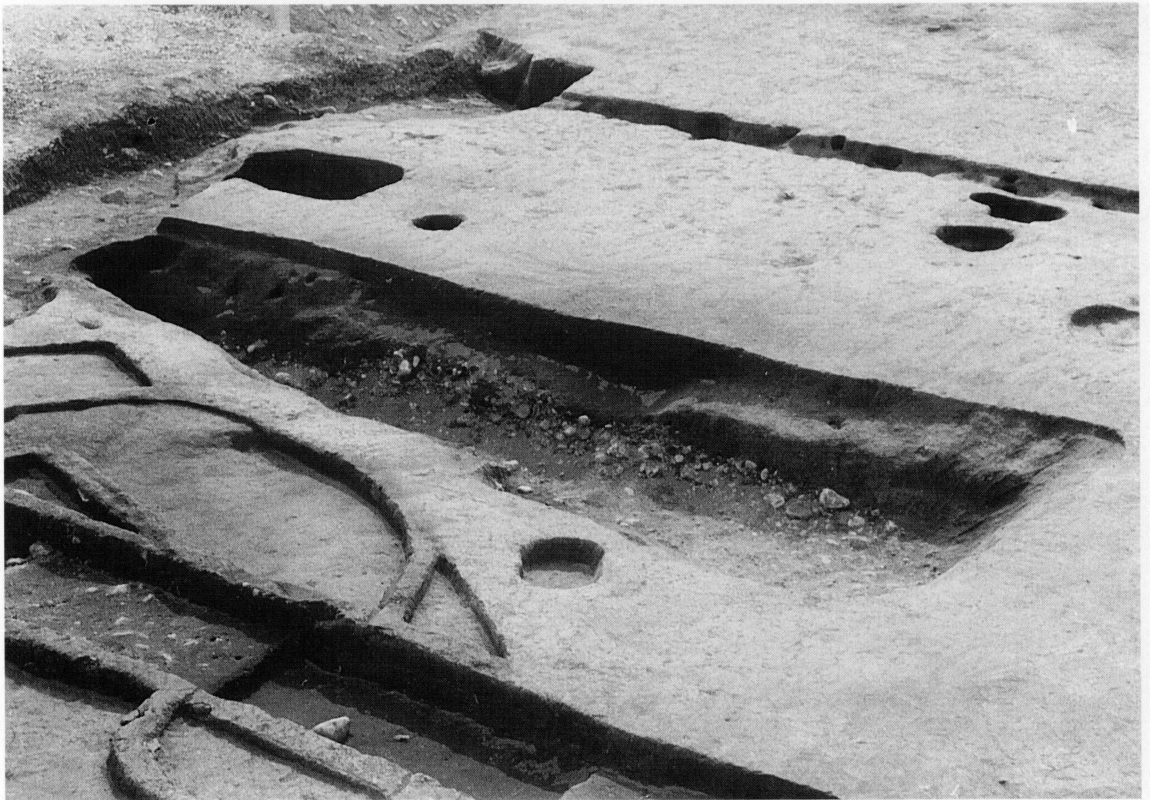


鶴田岸添遺跡1SD001・1SI005（南西から）



鶴田岸添遺跡1SD001・1SI005 (北東から)

鶴田岸添遺跡1SD001・1SI005 (北東から)

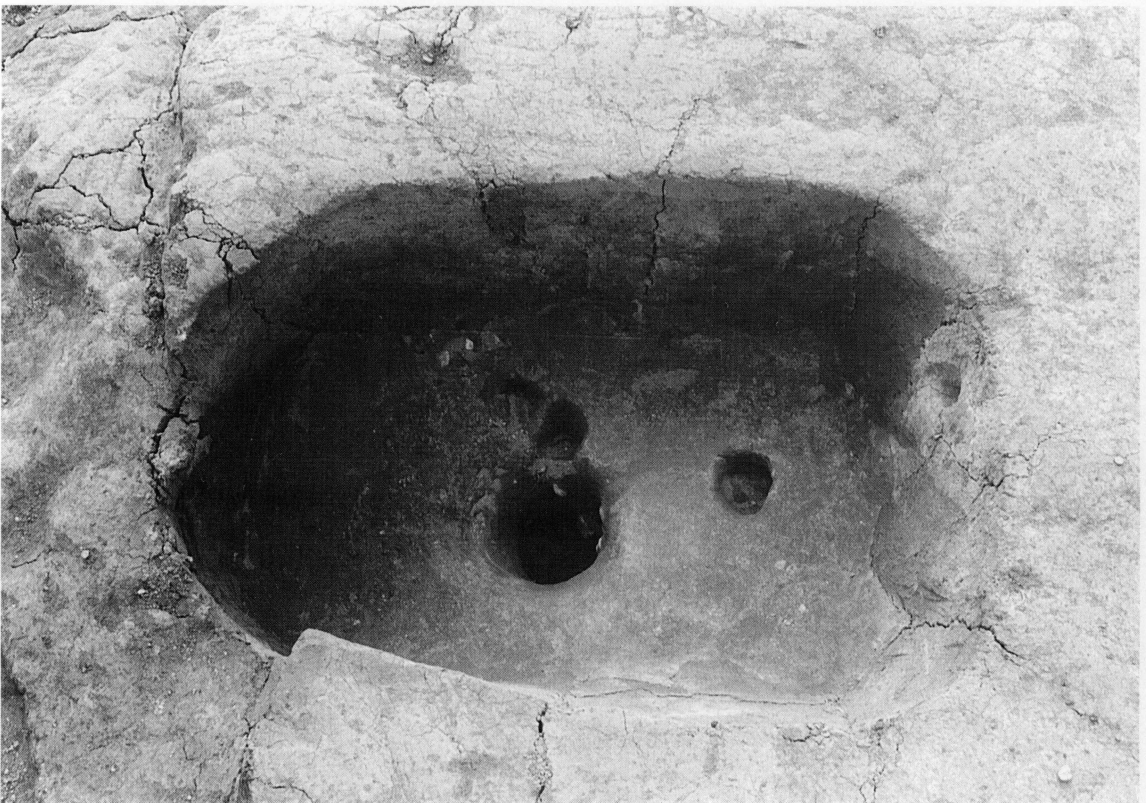


鶴田岸添遺跡1SX012 (南から)

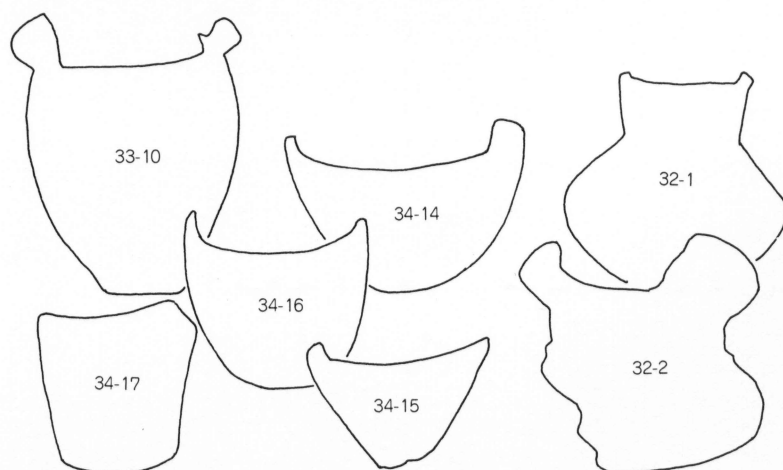
鶴田岸添遺跡1SX012 (南から)



鶴田岸添遺跡1SX015 (南から)



鶴田岸添遺跡1SX015 (東から)



筑後東部地区遺跡群 I
筑後市文化財調査報告書第11集

1994年3月

編集発行 筑後市教育委員会
福岡県筑後市大字山ノ井898
印 刷 山下プリント
筑後市大字熊野1848の6